



こころ

下

- 先生と遺書 -

夏目漱石



青空文庫



青空
文庫

わたくし

「……私はこの夏あなたから二、三度手紙を受け取りました。東京で相当の地位を得たいから宜しく頼むと書いてあつたのは、たしか二度目に手に入つたものと記憶しています。私はそれを読んだ時何とかしたいと思つたのです。少なくとも返事を上げなければ濟まんとは考えたのです。しかし自白すると、私はあなたの依頼に対して、まるで努力をしなかつたのです。ご承

知の通り、交際区域の狭いというよりも、世の中に
たつた一人で暮しているといった方が適切なくらいの
私には、そういう努力をあえてする余地が全くないの
です。しかしそれは問題ではありません。実をいうと、
私はこの自分をどうすれば好いいのかと思わい煩わづらつてい
たところなのです。このまま人間の中に取り残された
ミイラのように存在して行こうか、それとも……その
時分の私は「それとも」という言葉を心のうちで繰り
返すたびにぞつとしました。馳かけあし足で絶壁の端はじまで来て、
急に底の見えない谷を覗のぞき込んだ人のように。私は

卑怯ひきようでした。そうして多くの卑怯な人と同じ程度において煩悶ほんもんしたのです。遺憾いかんながら、その時の私には、あなたというものがほとんど存在していなかったといつても誇張ではありません。一歩進めていうと、あなたの地位、あなたの糊口ここうの資し、そんなものは私にとつてまるで無意味なものでした。どうでも構わなかったのです。私はそれどころの騒ぎでなかったのです。私は状差じょうさしへあなたの手紙を差したなり、依然として腕組をして考え込んでいました。宅うちに相應の財産があるものが、何を苦しんで、卒業するかしないのに、地位

地位といつて藻掻き廻るのか。私はむしろ苦々しい気分で、遠くにいるあなたにこんな一瞥いちべつを与えただけでした。私は返事を上げなければ済まないあなたに対して、言訳いいわけのためにこんな事を打ち明けるのです。あなたを怒らすためにわざと無駄ぶしつけな言葉を弄ろうするのではありません。私の本意は後あとをご覧になればよく解わかる事と信じます。とにかく私は何とか挨拶あいさつすべきところを黙っていたのですから、私はこの怠慢の罪をあなたの前に謝したいと思います。

その後ご私はあなたに電報を打ちました。有体ありていにいえ

ば、あの時私はちよつとあなたに会いたかつたのです。それからあなたの希望通り私の過去をあなたのための物語りたかつたのです。あなたは返電を掛^かけて、今東京へは出られないと断つて来ましたが、私は失望して永らくあの電報を眺^{なが}めていました。あなたも電報だけでは気が済まなかつたとみえて、また後から長い手紙を寄こしてくれたので、あなたの出京^{しゅつきよう}できない事情がよく解^{わか}りました。私はあなたを失礼な男だとも何とも思う訳がありません。あなたの大事なお父さんの病気をそつち退^のけにして、何でああなたが宅^{うち}を空^あけられるも

のですか。そのお父さんの生死しょうじを忘れているような私の態度こそ不都合です。——私は実際あの電報を打つ時に、あなたのお父さんの事を忘れていたのです。そのくせあなたが東京にいる頃ころには、難症なんしょうだからよく注意しなくってはいけなないと、あれほど忠告したのは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。あるいは私の脳髓のうずいよりも、私の過去が私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかも知れません。私はこの点においても充分私の我がを認めています。あなたに許してもらわなくてはなりません。

あなたの手紙、——あなたから来た最後の手紙——
を読んだ時、私は悪い事をしたと思いました。それで
その意味の返事を出そうかと考えて、筆を執りかけま
したが、一行も書かずに已めました。どうせ書くなら、
この手紙を書いて上げたかったから、そうしてこの手
紙を書くにはまだ時機が少し早過ぎたから、已めにし
たのです。私がただ来るに及ばないという簡単な電報
を再び打ったのは、それがためです。

二

「わたくし私はそれからこの手紙を書き出しました。平生へいぜい筆を
持ちつけない私には、自分の思うように、事件なり思
想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少し
で、あなたに対する私のこの義務を放擲ほうてきするところ
でした。しかしいくら止よそうと思つて筆を擱おいても、何
にもなりません。私は一時間経たたないうちにま
た書きたくなりました。あなたから見たら、これが義

務の遂行すいこうを重んずる私の性格のように思われるかも知
れませんか。私もそれは否いなみません。私はあなたの知っ
ている通り、ほとんど世間と交渉のない孤独な人間で
すから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を
見廻みまわしても、どの方角にも根を張っておりません。故
意か自然か、私はそれをできるだけ切り詰めた生活を
していたのです。けれども私は義務に冷淡だからこう
なつたのではありません。むしろ鋭敏えいびん過ぎて刺戟しげきに堪
えるだけの精力がないから、ご覧のように消極的な月
日を送る事になつたのです。だから一旦いったん約束した以上、

それを果たささないのは、大變厭いやな心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならぬのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といつても差支さしつかえないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜しいともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事のできない人に与えるくらいなら、私はむしろ私の経験を私の生命いのちと共に葬ほうむった方が好いいと思いま

す。実際ここにあなたという一人の男が存在していな
いならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他
人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万
といる日本人のうちで、ただあなたただだけに、私の過去
を物語りたいのです。あなたは真面目まじめだから。あなた
は真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと
いったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げ
かけて上げます。しかし恐れてはいけません。暗いも
のを凝じゅと見詰めて、その中からあなたの参考になるも

のをお攫つかみなさい。私の暗いというのは、固もとより倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考えは、今の若い人と大分違だいぶんつたところがあるかも知れません。しかしどう間違まちがつても、私自身のものです。間に合せに借りた損料そんりょうぎ着きではありません。だからこれから発達しようというあなたには幾分か参考になるだろうと思うのです。

あなたは現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する

態度もよく解わかつていてるでしょう。私はあなたの意見を
軽蔑けいべつまでしなかつたけれども、決して尊敬を払い得うる
程度にはなれなかつた。あなたの考えには何らの背景
もなかつたし、あなたは自分の過去をもつには余りに
若過ぎたからです。私は時々笑つた。あなたは物足り
なそうな顔をちよいちよ私に見せた。その極きよくあなた
は私の過去を絵巻物えまきもののように、あなたの前に展開して
くれと逼せまつた。私はその時心のうちで、始めてあなた
を尊敬した。あなたが無遠慮ぶえんりよに私の腹の中から、或ある
生きたものを捕つかまえようという決心を見せたからです。

私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜すすろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭いやであつた。それで他日たじつを約して、あなたの要求を斥しりぞけてしまった。私は今自分で自分の心臓を破つて、その血をあなたの顔に浴あびせかけようとしているのです。私の鼓動こどうが停とまつた時、あなたの胸に新しい命が宿る事ができるなら満足です。

「私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳はたちにならない時分でした。いつか妻さいがあなたに話していたようにも記憶していますが、二人は同じ病気で死んだのです。しかも妻があなたに不審を起させた通り、ほとんど同時とっていいくらいに、前後して死んだのです。実をいうと、父の病気は恐るべき腸窒ちようチフス扶斯チフスでした。それが傍そばにいて看護をした母に伝染したのです。

私は二人の間にできたたった一人の男の子でした。宅には相当の財産があつたので、むしろ鷹揚おうように育てられました。私は自分の過去を顧みて、あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母かどつちか、片方で好いから生きていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事ができたらうにと思いません。

私は二人の後に茫然ぼうぜんとして取り残されました。私には知識もなく、経験もなく、また分別もありませんでした。父の死ぬ時、母は傍にいる事ができませんで

た。母の死ぬ時、母には父の死んだ事さえまだ知らせてなかつたのです。母はそれを覚つていたか、または傍はたのものというごとく、実際父は回復期に向いつつあるものと信じていたか、それは分りません。母はただ叔父おじに万事を頼んでいました。そこに居合いあわせた私を指さすようにして、「この子をどうぞ何分なにぶん」といたしました。私はその前から両親の許可を得て、東京へ出るはずになつていましたので、母はそれもついでにいうつもりらしかったのです。それで「東京へ」とだけ付け加えましたら、叔父がすぐ後あとを引き取つて、「よろしい決し

て心配しないがいい」と答えました。母は強い熱に堪え得る^う体質の女なんでしたろうか、叔父は「確^{しつ}かりしたものだ」といつて、私に向つて母の事を褒^ほめていました。しかしこれがはたして母の遺言であつたのかどうだか、今考えると分らないのです。母は無論父の懼^かつた病気の恐るべき名前を知つていたのです。そうして、自分がそれに伝染していた事も承知していたのです。けれども自分はきつとこの病気で命を取られるとまで信じていたかどうか、そこになると疑う余地はまだいくらでもあるだろうと思われのです。その上

熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通つた明らかなものにせよ、一向記憶いっこうとなつて母の頭に影さえ残していない事がしばしばあつたのです。だから……しかしそんな事は問題ではありません。ただこういう風ふうに物を解きほどこいてみたり、またぐるぐる廻まわして眺ながめたりする癖くせは、もうその時分から、私にはちゃんと備わつていたのです。それはあなたにも始めからお断わりしておかなければならないと思ひますが、その実例としては当面の問題に大した関係のないこんな記述が、かえつて役に立ちはしないかと考えます。

あなたの方でもまあそのつもりで読んでください。この性分しょうぶんが倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来こうらいますます他の徳義心ひとを疑うようになったのだらうと思うのです。それが私の煩悶ほんもんや苦悩に向つて、積極的に大きな力を添えているのは慥たしかですから覚え
ていて下さい。

話が本筋ほんすじをはずれると、分り悪にくくなりますからまたあとへ引き返しましょう。これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人ほかと比べたら、あるいは多少落ち付いていやしないかと思つてい

るのです。世の中が眠ると聞こえだすあの電車の響ひびきももう途絶とだえました。雨戸の外にはいつの間にか憐あわれな虫の声こゑが、露の秋をまた忍びやかに思い出させるような調子で微かすかに鳴いています。何も知らない妻さいは次の室へやで無邪気にすやすや寝入ねいっています。私が筆を執とると、一字一劃かくができあがりつつペンの先で鳴っています。私はむしろ落ち付いた気分きぶんで紙に向っているのです。不馴ふなれのためにペンが横へ外それるかも知れませんが、頭のうらんが悩乱なやして筆がしどろに走るのではないように思います。

四

「とにかくたつた一人取り残された私は、母のいい付け通り、この叔父おじを頼るより外ほかに途みちはなかつたのです。叔父はまた一切いっさいを引き受けて凡すべての世話をしてくれました。そうして私を私の希望する東京へ出られるように取り計らってくれました。

私は東京へ来て高等学校へはいりました。その時の高等学校の生徒は今よりもよほど殺伐さつぱつで粗野でした。

私の知ったものに、夜中職人と喧嘩けんかをして、相手の頭へ下駄げたで傷を負わせたのがありました。それが酒を飲んだ揚句あげくの事なので、夢中に擲なぐり合いをしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。ところがその帽子の裏には当人の名前がちやんと、菱形ひしがたの白いきれの上に書いてあつたのです。それで事が面倒になつて、その男はもう少しで警察から学校へ照会されるところでした。しかし友達が色々と骨を折つて、ついに表沙汰おもてざたにせず済むようにしてやりました。こんな乱暴な行為を、上品な今の空気きのな

かに育つたあなた方に聞かせたら、定めて馬鹿馬鹿しい感じを起すでしょう。私も実際馬鹿馬鹿しく思います。しかし彼らは今の学生にない一種質朴しつぽくな点をその代りにもつていたのです。当時私の月々叔父から貰もらっていた金は、あなたが今、お父さんから送つてもらおう学資に比べると遙はるかに少ないものでした。（無論物価も違いましたよ）。それでいて私は少しの不足も感じませんでした。のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨うらやましがる憐あわれな境遇にいた訳ではないのです。今から回顧すると、むし

ろ人に羨ましがられる方だったのでしよう。というのは、私は月々極きまった送金の外に、書籍費、（私はその時分から書物を買う事が好きでした）、および臨時の費用を、よく叔父から請求して、ずんずんそれを自分の思うように消費する事ができたのですから。

何も知らない私は、叔父おじを信じていたばかりでなく、常に感謝の心をもつて、叔父をありがたいもののように尊敬していました。叔父は事業家でした。県会議員にもなりました。その関係からでもあります。政

党にも縁故があつたように記憶しています。父の実の

弟ですけれども、そういう点で、性格からいうと父とはまるで違った方へ向いて発達したようにも見えます。父は先祖から譲られた遺産を大事に守って行くとくじついつぼう篤実一方の男でした。楽しみには、茶だの花だのをやりました。それから詩集などを読む事も好きでした。書画骨董しよがこつとうといった風ふうのものにも、多くの趣味をもっている様子でした。家は田舎いなかにありましたけれども、二里りばかり隔たった市し、——その市には叔父が住んでいたので、——その市から時々道具屋かけものが懸物だの、香炉こうろだのを持って、わざわざ父に見せに来ました。父

は一口ひとくちにいうと、まあマン・オフ・ミーンズとでも評したら好いいのでしよう。比較的上品な嗜好しこうをもった田舎紳士だつたのです。だから気性きしょうからいうと、闊達かつたつな叔父とはよほどの懸隔けんかくがありました。それでいて二人はまた妙に仲が好かつたのです。父はよく叔父を評して、自分よりも遙はるかに働きのある頼もしい人のようにいつていました。自分のように、親から財産を譲られたものは、どうしても固有の材幹さいかんが鈍にぶる、つまり世の中と闘う必要がないからいけないのだともいつていました。この言葉は母も聞きました。私も聞きました。父はむ

しろ私の心得になるつもりで、それをいつたらしく思われます。「お前もよく覚えていたが好い」と父はその時わざわざ私の顔を見たのです。だから私はまだそれを忘れずにいます。このくらい私の父から信用されたり、褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑う事ができるでしょう。私にはただでさえ誇りになるべき叔父でした。父や母が亡くなって、万事その人の世話にならなければならぬ私には、もう単なる誇りではなかつたのです。私の存在に必要な人間になつたのです。

五

「私が夏休みを利用して始めて国へ帰った時、両親の死に断えた私の住居すまいには、新しい主人として、叔父夫婦が入れ代って住んでいました。これは私が東京へ出る前からの約束でした。たった一人取り残された私が家にいない以上、そうでもするより外ほかに仕方がなかったのです。

叔父はその頃市ころにある色々な会社に関係していたよ

うです。業務の都合からいえば、今までの居宅きよたくに寝起ねおきする方が、二里りも隔へだたった私の家に移るより遙かに便利だといって笑いました。これは私の父母が亡くなつた後あと、どう邸やしきを始末して、私が東京へ出るかという相談の時、叔父の口を洩もれた言葉であります。私の家は旧ふるい歴史をもっているので、少しはその界限かいわいで人に知られていました。あなたの郷里でも同じ事だろうと思えますが、田舎では由緒ゆいしよのある家を、相続人があるのに壊こわしたり売つたりするのは大事件です。今の私ならそのくらいの事は何とも思いませんが、その頃はまだ

子供でしたから、東京へは出たし、家はそのままにして置かなければならず、はなはだ所置しよちに苦しんだのです。

叔父おじは仕方なしに私の空家あきやへはいる事を承諾してくれました。しかし市しの方にある住居すまいもそのままにしておいて、両方の間を往いつたり来たりする便宜を与えてもらわなければ困るといいました。私に固もとより異議のありようはありますがありません。私はどんな条件でも東京へ出られれば好いいくらいに考えていたのです。

子供らしい私は、故郷ふるさとを離れても、まだ心の眼で、

懐かしげに故郷の家を望んでいました。固よりそこにはまだ自分の帰るべき家があるという旅人たびびとの心で望んでいたのです。休みが来れば帰らなくてはならないという気分は、いくら東京を恋しがって出て来た私にも、力強くあつたのです。私は熱心に勉強し、愉快に遊んだ後あと、休みには帰れると思うその故郷の家をよく夢に見ました。

私の留守の間、叔父はどんな風ふうに両方の間を往き来していたか知りません。私の着いた時は、家族のものが、みんな一つ家いえの内に集まっていました。学校へ出

る子供などは平生おそらく市の方^{へいぜい}にいたのでしようが、これも休暇のために田舎^{いなか}へ遊び半分^かと行った格^{かく}で引き取られていました。

みんな私の顔を見て喜びました。私はまた父や母のいた時より、かえって賑^{にぎ}やかで陽気になった家の様子を見て嬉^{うれ}しがりしました。叔父はもと私の部屋になつていた一間^{ひとま}を占領している一番目の男の子を追い出して、私をそこへ入れました。座敷の数^{かず}も少くないのだから、私はほかの部屋で構わないと辞退したのですけれども、叔父はお前の宅^{うち}だからといって、聞きませんで

した。

私は折々亡くなつた父や母の事を思い出す外ほかに、何の不愉快もなく、その一夏ひとなつを叔父の家族と共に過ごして、また東京へ帰つたのです。ただ一つその夏の出来事として、私の心にむしろ薄暗い影を投げたのは、叔父夫婦が口を揃そろえて、まだ高等学校へ入つたばかりの私に結婚を勧める事でした。それは前後で丁度三、四回も繰り返されたでしょう。私も始めはただその突然はつきりなのに驚いただけでした。二度目には判然断りました。三度目にはこつちからとうとうその理由を反問しなけ

ればならなくなりました。彼らの主意は単簡たんかんでした。早く嫁よめを貰もらってこの家へ帰つて来て、亡くなつた父の後を相続しろというだけなのです。家は休暇やすみになつて帰りさえすれば、それでいいものと私は考えていました。父の後を相続する、それには嫁が必要だから貰もらう、両方とも理屈としては一通り聞ひととおこえます。ことに田舎の事情を知っている私には、よく解わかります。私も絶対にそれを嫌つてはいなかつたのでしよう。しかし東京へ修業に出たばかりの私には、それが遠眼鏡とおめがねで物を見るように、遥はるか先の距離に望まれるだけでした。

私は叔父の希望に承諾を与えないで、ついにまた私の家を去りました。

六

「私は縁談の事をそれなり忘れてしまいました。私の
周囲ぐるりを取り捲まいている青年の顔を見ると、世帯染しよたいじみた
ものは一人もいません。みんな自由です、そうして悉ことごと
く単独らしく思われたのです。こういう気楽な人の中うち
にも、裏面にはいり込んだら、あるいは家庭の事情に
余儀なくされて、すでに妻を迎えていたものがあつた
かも知れませんが、子供らしい私はそこに気が付きま

せんでした。それからそういう特別の境遇に置かれた人の方でも、四辺あたりに気兼きがねをして、なるべくは書生に縁の遠いそんな内輪の話はしないように慎んでいたのでしよう。後あとから考えると、私自身がすでにその組だったのですが、私はそれさえ分らずに、ただ子供らしく愉快に修学の道を歩いて行きました。

学年の終りに、私はまた行李こうりを絡からげて、親の墓のある田舎いなかへ帰って来ました。そうして去年と同じように、父ちちはは母のいたわが家いえの中で、また叔父おじ夫婦とその子供の変わらない顔を見ました。私は再びそこで故郷ふるさとの匂においを

嗅かぎました。その匂かいは私に取って依然として懐かかしいものでありました。一学年の単調を破る変化としても有難いものに違ちがいなかつたのです。

しかしこの自分を育て上げたと同じような匂かいの中で、私はまた突然結婚問題を叔父から鼻の先へ突き付けられました。叔父のいう所は、去年の勧誘を再び繰り返したのみです。理由も去年と同じでした。ただこの前すす勧められた時には、何らの目的物がなかつたのに、今度はちゃんと肝かんじん心の当人を捕つかまえていたので、私はなお困らせられたのです。その当人というのは叔父の

娘すなわち私の従妹いとこに当る女でした。その女を貰もらつてくれれば、お互いのために便宜である、父も存生中ぞんじょうちゆうそんな事を話していた、と叔父がいうのです。私もそうすれば便宜だとは思いました。父が叔父にそういう風ふうな話をしたというのもあり得うべき事と考えました。しかしそれは私が叔父にいわれて、始めて気が付いたので、いわれない前から、覚さとつていた事柄ではないのです。だから私は驚きました。驚いたけれども、叔父の希望に無理のないところも、それがたによく解わかりました。私は迂闊うかつなのでしょうか。あるいはそうなのか

も知れませんが、おそらくその従妹に無頓着であつたのが、おもな原因げんいんになつてゐるのでしよう。私は小供こどものうちから市しにゐる叔父の家うちへ始終遊びに行きました。ただ行くばかりでなく、よくそこに泊りました。そうしてこの従妹とはその時分から親しかつたのです。あなたもご承知でしょう、兄妹きょうだいの間に恋の成立した例ためしのないのを。私はこの公認された事実を勝手に布ふ衍えんしてゐるかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた男女なんによの間には、恋に必要な刺戟しげきの起る清新な感じが失われてしまうように考えています。香かうをかぎ得うるのは、

香を焚たき出した瞬間に限るごとく、酒を味わうのは、酒を飲み始めた刹那せつなにあるごとく、恋の衝動にもこういう際きわどい一点が、時間の上に存在しているとしたか思われなぬのです。一度平気でそこを通り抜けたら、馴なれれば馴れるほど、親しみが増すだけで、恋の神経はだんだん麻痺まひして来るだけです。私はどう考え直しても、この従妹いとこを妻にする気にはなれませんでした。

叔父おじはもし私が主張するなら、私の卒業まで結婚を延ばしてもいいといいました。けれども善は急げといことわざう諺ことわざもあるから、できるなら今のうちに祝言しゅうげんの盃さかずきだけ

は済ませておきたいともいいました。当人に望みのない私にはどつちにしたって同じ事です。私はまた断りました。叔父は厭いやな顔をしました。従妹は泣きました。私に添われないから悲しいのではありません。結婚の申し込みを拒絶されたのが、女として辛つらかったからです。私が従妹を愛していないごとく、従妹も私を愛していない事は、私によく知れていました。私はまた東京へ出ました。

七

「私が二度目に帰国したのは、それからまた一年経つた夏の取付とつつきでした。私はいつでも学年試験の済むのを待ちかねて東京を逃げました。私には故郷ふるさとがそれほど懐かしかったからです。あなたにも覚えがあるでしょう、生れた所は空気が色が違います、土地の匂いにおも格別です、父や母の記憶も濃こまやかに漂ただよっています。一年のうちで、七、八の二月ふたつきをその中に包くるまれて、穴に入つ

た蛇へびのように凝じつとしてゐるのは、私に取つて何よりも温かい好いい心持だつたのです。

単純な私は従妹との結婚問題について、さほど頭を痛める必要がないと思つていました。厭なもの断る、断つてさえしまえば後あとには何も残らない、私はこう信じていたのです。だから叔父の希望通りに意志を曲げなかつたにもかかわらず、私はむしろ平気でした。過去一年の間いまだかつてそんな事に屈くつ托たくした覚えもなく、相変らずの元気で国へ帰つたのです。

ところが帰つて見ると叔父の態度が違つています。

元のようによく顔をして私を自分の懐ふところに抱だこうと
しません。それでも鷹揚おとうように育った私は、帰って四、五日の
間は気が付かずにいました。ただ何かの機会にふと変
に思い出したのです。すると妙なものは、叔父ばかりで
はないのです。叔母おばも妙なのです。従妹も妙なのです。
中学校を出て、これから東京の高等商業へはいるつも
りだといって、手紙でその様子を聞き合せたりした叔
父の男の子まで妙なのです。

私の性分しょうぶんとして考えずにはいられなくなりました。
どうして私の心持がこう変ったのだらう。いやどうし

て向うがこう変つたのだらう。私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗つて、急に世の中が判然見えるようになつてくれたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世にいらなくなつた後でも、いた時と同じように私を愛してくれるものと、どこか心の奥で信じていたのです。もつともその頃でも私は決して理に暗い質ではありませんでした。しかし先祖から譲られた迷信の塊りも、強い力で私の血の中に潜んでいたので、今でも潜んでいるでしょう。

私はたった一人山へ行つて、父母の墓の前に跪きま

した。半は哀悼ななかぼの意味、半は感謝あいとうの心持で跪いたので
す。そうして私の未来の幸福が、この冷たい石の下に
横たわる彼らの手にまだ握られてでもいるような気分
で、私の運命を守るべく彼らに祈りました。あなたは
笑うかもしれない。私も笑われても仕方がないと思い
ます。しかし私はそうした人間だったのです。

私の世界は掌たなごころを翻すように変わりました。もつとも
これは私に取って始めての経験ではなかったのです。
私が十六、七の時でしたらう、始めて世の中に美しい
ものがあるという事実を発見した時には、一度にはつ

と驚きました。何遍なんべんも自分の眼うたぐを疑うたぐって、何遍も自分の眼こすを擦こすりました。そうして心うちの中でああ美しいと叫うびました。十六、七といえは、男でも女でも、俗いろけにいう色いろけ気の付く頃です。色いろけ気の付いた私は世の中にある美しいものの代表者として、始めて女を見る事ができたのです。今までその存在に少しも気の付かなかつた異性めくらに対して、盲目めくらの眼たちまが忽あち開あいたのです。それ以来私の天地は全く新しいものとなりました。

私が叔父おじの態度に心づいたのも、全くこれと同じなんでしょう。俄然がぜんとして心づいたのです。何の予感も

準備もなく、不意に来たのです。不意に彼と彼の家族が、今までとはまるで別物のように私の眼に映ったのです。私は驚きました。そうしてこのままにしておいては、自分の行先がゆくさきどうなるか分らないという気になりました。

八

「私は今まで叔父任せまかにしておいた家の財産について、詳しい知識を得なければ、死んだ父母ちちははに対して済まないといい気を起したのです。叔父は忙しい身体からだだと自稱するごとく、毎晩同じ所に寝泊りねとまはしていませんでした。二日家うちへ帰ると三日は市しの方で暮らすといった風ふうに、両方の間を往来ゆききして、その日その日を落ち付きのない顔で過ごしていました。そうして忙しいという

言葉を口癖くちくせのように使いました。何の疑いも起らない

時は、私も実際に忙しいのだろうと思っていたのです。それから、忙しがらなくては当世流でないのだろうと、皮肉にも解釈していたのです。けれども財産の事について、時間の掛かかる話をしようという目的ができた眼で、この忙しがる様子を見ると、それが単に私を避ける口実としか受け取れなくなつて来たのです。私は容易に叔父を捕つかまえる機会を得ませんでした。

私は叔父が市の方に妾めかけをもっているという噂うわさを聞きました。私はその噂を昔中学の同級生であつたある友

達から聞いたのです。妾を置くぐらいの事は、この叔父として少しも怪あやしむに足らないのですが、父の生きているうちに、そんな評判を耳に入れた覚えおぼのない私は驚きました。友達はその外ほかにも色々叔父についての噂を語って聞かせました。一時事業で失敗しかかっていたように他ひとから思われていたのに、この二、三年来また急に盛り返して来たというのも、その一つでした。しかも私の疑惑を強く染めつけたものの一つでした。私はとうとう叔父おじと談判を開きました。談判というのは少し不穩当ふおんとうかも知れませんが、話の成行きなりゆからい

うと、そんな言葉で形容するより外に途みちのないところへ、自然の調子が落ちて来たのです。叔父はどこまでも私を子供扱いにしようとしめます。私はまた始めから猜疑さいぎの眼で叔父に対しています。穏やかに解決のつくはずはなかったのです。

遺憾いかんながら私は今その談判の顛末てんまつを詳しくここに書く事のできないほど先を急いでいます。実をいうと、私はこれより以上に、もつと大事なものを控えているのです。私のペンは早くからそこへ辿たどりつきたがっているのを、漸やっとの事で抑えつけているくらいです。あ

なたに会って静かに話す機会を永久に失った私は、筆を執る術とすべに慣れないばかりでなく、貴い時間たつとを惜むおしという意味からして、書きたい事も省かなければなりません。

あなたはまだ覚えているでしょう、私がいつかあなたに、造り付けの悪人が世の中にいるものではないといった事を。多くの善人がいざという場合に突然悪人になるのだから油断してはいけないといった事を。あの時あなたは私に昂奮こうふんしていると注意してくれました。そうしてどんな場合に、善人が悪人に変化するのかと

尋ねました。私がただ一口金と答えた時、あなたは不満な顔をしました。私はあなたの不満な顔をよく記憶しています。私は今あなたの前に打ち明けるが、私はあの時この叔父の事を考えていたのです。普通のものが金を見て急に悪人になる例として、世の中に信用するに足るものが存在し得ない例として、憎悪ぞうおと共に私はこの叔父を考えていたのです。私の答えは、思想界の奥へ突き進んで行こうとするあなたに取って物足りなかつたかも知れませんが、陳腐ちんぷだつたかも知れませんが、現に私は昂

奮していたではありませんか。私は冷ひややかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きていると信じています。血の力で体たいが動くからです。言葉が空気に波動を伝えるばかりでなく、もつと強い物にもつと強く働き掛ける事ができるからです。

九

「ひとくち二口でいうと、わたくし叔父は私の財産をごまか胡魔化したのです。事は私が東京へ出ている三年の間にたやす容易く行われたのです。すべてをまか叔父任せにして平気でいた私は、世間的にいえば本当の馬鹿でした。世間的以上の見地から評すれば、あるいは純なる尊たつとい男とでもいえましようか。私はその時のおの己れを顧みて、なぜもつと人が悪く生れて来なかつたかと思うと、正直過ぎた自分がくや口惜

しくつて堪りません。しかしまたどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて見たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵ちりに汚れた後あとの私です。きたなくなつた年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかにあなたより先輩でしょう。

もし私が叔父の希望通り叔父の娘と結婚したならば、その結果は物質的に私に取って有利なものでしたろうか。これは考えるまでもない事と思います。叔父おじは策略で娘を私に押し付けようとしたのです。好意的に両

家の便宜を計るといふよりも、ずっと下卑た利害心に
駆られて、結婚問題を私に向けたのです。私は従妹を
愛していないだけで、嫌つてはいなかつたのですが、
後から考えてみると、それを断つたのが私には多少の
愉快になると思います。胡魔化されるのはどつちにし
ても同じでしょうけれども、載せられ方からいえば、
従妹を貰わない方が、向うの思い通りにならないとい
う点から見て、少しは私の我が通つた事になるのです
から。しかしそれはほとんど問題とするに足りない
些細な事柄です。ことに関係のないあなたにいわせた

ら、さぞ馬鹿気た意地に見えるでしょう。

私と叔父の間に他の親戚のものがはいりました。その親戚のものも私はまるで信用していませんでした。信用しないばかりでなく、むしろ敵視していました。私は叔父が私を欺いたと覚ると共に、他のものも必ず自分を欺くに違いないと思い詰めました。父があれば賞め抜いていた叔父ですらこうだから、他のものはこの論理でした。

それでも彼らは私のために、私の所有にかかる一切のものを纏めてくれました。それは金額に見積ると、

私の予期より遙かに少ないものでした。私としては

黙つてそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取つ

おおよげざた

て公沙汰にするか、二つの方法しかなかつたのです。

私は憤りました。また迷いました。訴訟にすると落着

らくちやく

までに長い時間のかかる事も恐れしました。私は修業中
のからだですから、学生として大切な時間を奪われる

のは非常の苦痛だとも考えました。私は思案の結果、

市しにおける中学の旧友に頼んで、私の受け取つたものを、

すべて金の形かたちに変えようと思いました。旧友は止よした方

が得だといつて忠告してくれましたが、私は聞きませ

んでした。私は永く故郷こきょうを離れる決心をその時に起したのです。叔父の顔を見まいと心のうちで誓ったのです。

私は国を立つ前に、また父と母の墓へ参りました。私はそれぎりその墓を見た事がありません。もう永久に見る機会も来ないでしょう。

私の旧友は私の言葉通りに取り計らってくれました。もつともそれは私が東京へ着いてからよほど経たつた後のちの事です。田舎いなかで畠地はたちなどを売ろうとしたって容易には売れませんし、いざとなると足元を見て踏み倒され

る恐れがあるので、私の受け取った金額は、時価に比べるとよほど少ないものでした。自白すると、私の財産は自分が懐ふところにして家を出た若干の公債と、後あとからこの友人に送ってもらった金だけなのです。親の遺産としては固もとより非常に減っていたに相違ありません。しかも私が積極的に減らしたのでないから、なお心持が悪かったのです。けれども学生として生活するにはそれで充分以上でした。実をいうと私はそれから出る利子の半分も使えませんでした。この余裕ある私の学生生活が私を思いも寄らない境遇に陥おとし入れたのです。

十

「金に不自由のない私は、わたくし騒々しい下宿を出て、新しく一戸を構えてみようかという気になつたのです。しかしそれには世帯道具をかう面倒もありますし、世話をしてくれる婆さんばあの必要も起りますし、その婆さんがまた正直でなければ困るし、宅うちを留守にしても大丈夫なものではなければ心配だし、といった訳で、ちよくちよいと実行する事は覚束なく見えたのです。ある日

私はまあ宅うちだけでも探してみようかというそぞろ心こころから、散歩がてらに本郷台ほんごうだいを西へ下りて小石川の坂をまつすぐ真直でんずういんに伝通院の方へ上がりました。電車の通路になつてから、あそこいらの様子がまるで違つてしまいました。たが、その頃ころは左手が砲兵工廠ほうへいこうしょうの土塀どべいで、右は原とも丘ともつかない空地くうちに草が一面に生えていたものです。私はその草の中に立つて、何心なにこころなく向うの崖がけを眺ながめました。今でも悪い景色ではありませんが、その頃はまたずつとあの西側の趣おもむきが違つていました。見渡す限り緑が一面に深く茂っているだけでも、神経が休まりま

す。私はふとここいらに適当な宅うちはないだろうかと思
いました。それで直すぐ草原くさはらを横切つて、細い通りを北
の方へ進んで行きました。いまだに好いい町になり切れ
ないで、がたびししているあの辺へんの家並いえなみは、その時分
の事ですから、いぶん汚よごならしいものでした。私は
露次ろじを抜ぬけたり、横丁よこちようを曲まがつたり、ぐるぐる歩き廻まわり
ました。しまいに駄菓子屋だがしやの上かみさんに、ここいらに小
ぢんまりした貸家かしやはないかと尋ねてみました。上さん
は「そうですね」といつて、少時しばらく首をかしげていました
が、「かし家やはちよいと……」と全く思い当たらない風ふうで

した。私は望のぞみのないものと諦あきららめて帰り掛けました。

すると上さんがまた、「素人下宿しろうとけしゆくじゃいけませんか」と

聞くのです。私はちよつと気が変わりました。静かな

素人屋しろうとやに一人で下宿しているのは、かえつて家うちを持つ

面倒がなくなつて結構だろうと考え出したのです。それからその駄菓子屋の店に腰を掛けて、上さんに詳しい事を教えてもらいました。

それはある軍人の家族、というよりもむしろ遺族、

の住んでいる家でした。主人は何でも日清戦争にっしんの時か

何かに死んだのだと上さんがいいました。一年ばかり

前までは、市ヶ谷いちがやの士官学校しかんの傍そばとかに住んでいたのだが、厩うまやなどがあつて、邸やしきが広過ぎるので、そこを売り払つて、ここへ引つ越して来たけれども、無人ぶにんで淋さむしくつて困るから相当の人があつたら世話をしてくれと頼まれていたのだそうです。私は上さんから、その家には未亡人びぼうじんと一人娘ひとりむすめと下女げじよより外ほかにいないのだという事を確かめました。私は閑静けんじやうで至極しじやく好かろうと心のうちうちに思いました。けれどもそんな家族かぞのうちうちに、私のようなのが、突然行つたところで、素性すじやうの知れない書生さんという名称のもとに、すぐ拒絶されはしまい

かという掛念けねんもありました。私は止よそうかとも考えませんでした。しかし私は書生としてそんなに見苦しい服装なりはしていませんでした。それから大学の制帽を被かぶつていました。あなたは笑うでしょう、大学の制帽がどうしたんだといって。けれどもその頃の大学生は今と違って、大分だいぶん世間に信用のあつたものです。私はその場合この四角な帽子に一種の自信を見出みいだしたくらいです。そうして駄菓子屋の上さんに教わった通り、紹介も何もなしにその軍人の遺族うちの家を訪ねました。

私は未亡人びぼうじんに会って来意らいいを告げました。未亡人は私

の身元やら学校やら専門やらについて色々質問しました。そうしてこれなら大丈夫だということと、ころをどこかに握ったのでしよう、いつでも引越して来て差支さしつかえないという挨拶あいさつを即坐そくざに与えてくれました。未亡人は正しい人でした、また判然はつきりした人でした。私は軍人の妻君さいくんというものはみんなこんなものかと思つて感服しました。感服もしたが、驚きもしました。この気性きしょうでどこが淋さむしいのだらうと疑いもしました。

十一

「私は早速さつそくその家へ引き移りました。私は最初来た時に未亡人と話をした座敷を借りたのです。そこは宅中うちじゆうで一番好いいい室へやでした。本郷辺ほんごうへんに高等下宿といった風ふうの家がぽつぽつ建てられた時分の事ですから、私は書生として占領し得る最も好い間まの様子を心得ていました。私の新しく主人となつた室は、それらよりもずっと立派でした。移つた当座は、学生としての私には過ぎる

くらいに思われたのです。

室の広さは八畳でした。床の横に違い棚があつて、縁と反対の側には一間の押入れが付いていました。窓は一つもなかつたのですが、その代り南向きの縁に明るい日がよく差しました。

私は移つた日に、その室の床に活けられた花と、その横に立て懸けられた琴を見ました。どつちも私の氣に入りませんでした。私は詩や書や煎茶を嗜なむ父の傍で育つたので、唐めいた趣味を小供のうちからもつていました。そのためでもありませんか、こういう

艶めかしいなま裝飾をいつの間にか軽蔑する癖が付いてい

たのです。

私の父が存生中ぞんしようちゆうにあつめた道具類は、例の叔父おじのた

めに滅茶滅茶めちやめちやにされてしまったのですが、それでも多

少は残っていました。私は国を立つ時それを中学の旧

友に預かってもらいました。それからその中うちで面白そ

うなものを四、五幅ふく裸にして行李こうりの底へ入れて来まし

た。私は移るや否いなや、それを取り出して床へ懸けて楽

しむつもりでいたのです。ところが今いった琴いけばなと活花

を見たので、急に勇気がなくなつてしまいました。後あと

から聞いて始めてこの花が私に対するご馳走ちそうに活けられたのだという事を知った時、私は心のうちで苦笑しました。もつとも琴は前からそこにあつたのですから、これは置き所がないため、やむをえずそのままに立て懸けてあつたのでしよう。

こんな話をすると、自然その裏に若い女の影があな
たの頭を掠かすめて通るでしよう。移つた私にも、移らな
い初めからさういう好奇心がすでに動いていたのです。
こうした邪気じやきが予備的に私の自然を損なつたためか、
または私がまだ人慣ひとなれなかつたためか、私は始めてそ

このお嬢さんじょうさんに会った時、へどもどした挨拶あいさつをしました。その代りお嬢さんの方でも赤い顔をしました。

私はそれまで未亡人びぼうじんの風采ふうさいや態度から推おして、このお嬢さんのすべてを想像していたのです。しかしその想像はお嬢さんお嬢さんに取つてあまり有利なものではありませんでした。軍人の妻君さいくんだからあなのだろう、その

妻君の娘だからこうだろうといった順序で、私の推測は段々延びて行きました。ところがその推測が、お嬢さんの顔を見た瞬間しゅんかんに、悉く打ち消されました。そうして私の頭の中へ今まで想像も及ばなかつた異性の匂にお

いが新しく入つて来ました。私はそれから床の正面に活いけてある花が厭いやでなくなりました。同じ床に立て懸けてある琴も邪魔にならなくなりました。

その花はまた規則正しく凋しおれる頃になると活いけ更かえられるのです。琴も度々たびたび鍵かぎの手に折れ曲がつた筋違すじかいの室へやに運び去られるのです。私は自分の居間で机の上へやに頬杖ほおづえを突きながら、その琴の音ねを聞いていました。私にはその琴が上手なのか下手なのかよく解わからないのです。けれども余り込み入った手を弾ひかないところを見ると、上手なのじゃなかろうと考えました。まあ活花

の程度ぐらいなものだろうと思ひました。花なら私も好く分るのですが、お嬢さんは決して旨い方ではなかつたのです。

それでも臆面なく色々な花が私の床を飾つてくれました。もつとも活方はいつ見ても同じ事でした。それから花瓶もついで変つた例がありませんでした。しかし片方の音楽になると花よりももつと変でした。ぽつんぽつん糸を鳴らすだけで、一向肉声を聞かせないのです。唄わないのではありませんが、まるで内所話でもするように小さな声しか出さないのです。しかも叱

られると全く出なくなるのです。

私は喜んでこの下手な活花を眺^{なが}めては、まずそのような
琴の音^ねに耳を傾けました。

十二

「私の気分は国を立つ時すでに厭世的えんせいてきになつていました。他ひとは頼りにならないものだという観念が、その時骨の中まで染しみ込んでしまつたように思われたのです。私は私の敵視する叔父おじだの叔母おばだの、その他の親戚しんせきだのを、あたかも人類の代表者のごとく考え出しました。汽車へ乗つてさえ隣のものの様子を、それとなく注意し始めました。たまに向うから話し掛けられでもする

と、なおの事警戒を加えたくなくなりました。私の心は沈鬱ちんうつでした。鉛を呑のんだように重苦しくなる事が時々ありました。それでいて私の神経は、今いったごとくに鋭く尖とがつてしまつたのです。

私が東京へ来て下宿を出ようとしたのも、これが大きな原因げんいんになつていゝるように思われます。金に不自由がなければこそ、一戸を構えてみる気にもなつたのだといえ、ばそれまでですが、元の通りの私ならば、たとい懐中ふところに余裕ができて、好んでそんな面倒な真似まねはしなかつたでしょう。

私は小石川へ引き移つてからも、当分この緊張した気分くつろに寛ぎを与える事ができませんでした。私は自分で自分が恥ずかしいほど、きよときよと周囲を見廻みまわしていました。不思議にもよく働くのは頭と眼だけで、口の方はそれと反対に、段々動かなくなつて来ました。私は家のものうちの様子を猫のようによく観察しながら、黙つて机の前に坐すわつていました。時々は彼らに対して気の毒だと思ふほど、私は油断のない注意を彼らの上に注そそいでいたのです。おれは物を偷ぬすまない巾着きんちやく切みたきりようなものだ、私はこう考えて、自分が厭いやになる事さ

えあつたのです。

あなたは定めて^{さだ}変に思うでしよう。その私がそのお嬢^{じょう}さんをどうして好く^す余裕をもっているか。そのお嬢さんの下手な活花^{いけぼな}を、どうして嬉^{うれ}しがって眺^{なが}める余裕があるか。同じく下手なその人の琴をどうして喜んで聞く余裕があるか。そう質問された時、私はただ両方とも事実であつたのだから、事実としてあなたに教えて上げるといふより外^{ほか}に仕方がないのです。解釈は頭のあるあなたに任せるとして、私はただ一言^{いちごん}付け足しておきましょう。私は金に対して人類^{うたぐ}を疑つたけ

れども、愛に對しては、まだ人類を疑わなかつたので
す。だから他ひとから見ると変なものでも、また自分で考
えてみて、矛盾したもので、私の胸のなかでは平氣
で両立していたのです。

私は未亡人びぼうじんの事を常に奥さんといつていましたから、
これから未亡人と呼ばずに奥さんといひます。奥さん
は私を静かな人、大人おとなしい男と評しました。それから
勉強家だとも褒ほめてくれました。けれども私の不安な
眼つきや、きよときよとした様子については、何事も
口へ出しませんでした。気が付かなかつたのか、遠慮

していたのか、どつちだかよく解わかりませんが、何しろそこにはまるで注意を払っていないらしく見えました。それのみならず、ある場合に私を鷹揚おうような方かただといつて、さも尊敬したらしい口の利きき方をした事があります。その時正直な私は少し顔を赤らめて、向うの言葉を否定しました。すると奥さんは「あなたは自分で気が付かないから、そうおつしやるんです」と真ま面目まじめに説明してくれました。奥さんは始め私のような書生ううちを宅へ置くつもりではなかつたらしいのです。どこかの役所へ勤める人か何かに坐敷ざしきを貸す料簡りょうけんで、近所のものに

周旋を頼んでいたらしいのです。俸給が豊かゆたでなくつて、やむをえず素人屋しろうとやに下宿するくらいの人だからという考えが、それで前かたから奥さんの頭のどこかにはいつていたのでしよう。奥さんは自分の胸むねに描えがいたその想像のお客と私とを比較して、こつちの方を鷹揚だといつて褒ほめるのです。なるほどそんな切り詰めた生活をする人に比べたら、私は金銭にかけて、鷹揚だったかも知れません。しかしそれは気性きしょうの問題ではありませんから、私の内生活に取つてほとんど関係のないのと一般でした。奥さんはまた女だけにそれを私

の全体に推し^お広げて、同じ言葉を応用しよう^{つと}と力める
のです。

十三

「奥さんのこの態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもとほどきよろ付かなくなりました。自分の心が自分の坐すわっている所に、ちやんと落ち付いているような気にもなれました。要するに奥さん始め家うちのものが、僻ひがんだ私の眼や疑い深い私の様子に、てんから取り合わなかつたのが、私に大きな幸福を与えたのでしよう。私の神経は相手から

照り返して来る反射のないために段々静まりました。

奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風ふうに取り扱ってくれたものとも思われますし、また自分で公言するごとく、実際私を鷹揚おうようだと観察していたのかも知れません。私のこせつき方は頭の中の現象で、それほど外へ出なかつたようにも考えられますから、あるいは奥さんの方で胡魔化ごまかされていたのかも解わかりません。

私の心が静まると共に、私は段々家族のものと同接近して来ました。奥さんともお嬢さんとも笑談じょうだんをいうよ

うになりました。茶を入れたからといって向うの室へ
呼ばれる日もありました。また私の方で菓子を買って
来て、二人をこつちへ招いたりする晩もありました。
私は急に交際の区域が殖ふえたように感じました。それ
がために大切な勉強の時間を潰つぶされる事も何度となく
ありました。不思議にも、その妨害が私には一向いっこう邪魔
にならなかつたのです。奥さんはもとより閑人ひまじんでした。
お嬢さんは学校へ行く上に、花だの琴だのを習ってい
るんだから、定めて忙しかろうと思うと、それがまた
案外なもので、いくらでも時間に余裕をもっているよ

うに見えました。それで三人は顔さえ見るといつしよに集まつて、世間話をしながら遊んだのです。

私を呼びに来るのは、大抵お嬢さんでした。お嬢さんは縁側を直角に曲つて、私の室のへや前に立つ事もありますし、茶の間を抜けて、次の室の襖の影から姿を見せる事もありました。お嬢さんは、そこへ来てちよつと留とまります。それからきつと私の名を呼んで、「ご勉強？」と聞きます。私は大抵むずかしい書物を机の前に開けて、それを見詰めていましたから、傍はたで見たらさぞ勉強家のように見えたのでしよう。しかし實際を

いうと、それほど熱心に書物を研究してはいなかったのです。頁ページの上に眼は着けていながら、お嬢さんの呼びに来るのを待っているくらいなものでした。待っていて来ないと、仕方がないから私の方で立ち上がるのです。そうして向うの室の前へ行つて、こつちから「ご勉強ですか」と聞くのです。

お嬢さんの部屋へやは茶の間と続いた六畳でした。奥さんはその茶の間にいる事もあるし、またお嬢さんの部屋へやにいる事もありました。つまりこの二つの部屋は仕切しきりがあつても、ないと同じ事で、親子二人が往いつた

り来たりして、どつち付かずに占領していたのです。

私が外から声を掛けると、「おはいんなさい」と答えるのはきつと奥さんでした。お嬢さんはそこにいても滅多めったに返事をした事がありませんでした。

時たまお嬢さん一人で、用があつて私の室へはいつたついでに、そこに坐すわつて話し込むような場合もその内うちに出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安おかに冒おかされて来るのです。そうして若い女とただ差向さむかいで坐っているのが不安なのだとはかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。自分で自

分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。しかし相手の方はかえって平気でした。これが琴を浚さらうのに声さえ碌ろくに出せなかつたあの女かしらと疑われるくらい、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、「はい」と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいてお嬢さんは決して子供ではなかつたのです。私の眼にはよくそれが解わかっていました。よく解るよう
に振舞つて見せる痕迹こんせきさえ明らかでした。

十四

「私はお嬢さんの立つたあとで、ほつと一息ひといきするので
す。それと同時に、物足りないようなまた済まないよ
うな気持になるのです。私は女らしかったのかも知れ
ません。今の青年のあなたがたから見たらなおそう見
えるでしょう。しかしその頃ころの私たちは大抵そんなも
のだったのです。

奥さんは滅多めったに外出した事がありませんでした。た

まに宅を留守にする時でも、お嬢さんと私を二人ぎり残して行くような事はなかったのです。それがまた偶然なのか、故意なのか、私には解らないのです。私の口からいうのは変ですが、奥さんの様子を能く観察している、何だか自分の娘と私とを接近させたがっているらしくも見えるのです。それでいて、或る場合には、私に対して暗に警戒するところもあるようなのですから、始めてこんな場合に出会った私は、時々心持をわるくしました。

私は奥さんの態度をどつちかに片付けてもらいた

かつたのです。頭の働きからいえば、それが明らかかな
矛盾に違ひなかつたのです。しかし叔父おじに欺あざむかれた記
憶のまだ新しい私は、もう一步踏み込んだ疑さしほぎいを挟ま
ずにはいられませんでした。私は奥さんのこの態度の
どつちかが本場で、どつちかが偽いつわりだろうと推定しま
した。そうして判断に迷いました。ただ判断に迷うば
かりでなく、何でそんな妙な事をするかその意味が私
には呑のみ込めなかつたのです。理由わけを考え出そうとし
ても、考え出せない私は、罪を女という一字に塗なすり付
けて我慢した事もありました。必竟ひっきよう女だからああな

のだ、女というものはどうせ愚^ぐなものだ。私の考えは行き詰^つまればいつでもここへ落ちて来ました。

それほど女を見縊^{みくび}っていた私が、またどうしてもお嬢さんを見縊^{みくび}る事ができなかつたのです。私の理屈はその人の前に全く用を為^なさないほど動きませんでした。私はその人に対して、ほとんど信仰に近い愛をもっていたのです。私が宗教だけに用いるこの言葉を、若い女に應用するのを見て、あなたは変に思うかも知れませんが、私は今でも固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違ったものでないという事を固く信じ

ているのです。私はお嬢さんの顔を見るたびに、自分が美しくなるような心持がしました。お嬢さんの事を考えると、気高いけだか気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。もし愛という不可思議なものに両端りょうほじがあつて、その高い端はじには神聖な感じが働いて、低い端には性欲せいよくが動いているとすれば、私の愛はたしかにその高い極点を捕つかまえたものです。私はもとより人間として肉を離れる事のできない身体からだでした。けれどもお嬢さんを見る私の眼や、お嬢さんを考える私の心は、全く肉の臭いにおを帯びていませんでした。

私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増まして行つたのですから、三人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になつて来ました。もつともその変化はほとんど内面的で外へは現れて来なかつたのです。そのうち私はあるひよつとした機会から、今まで奥さんを誤解していたのではなからうかという気になりました。奥さんの私に対する矛盾した態度が、どつちも偽りではないのだらうと考え直して来たのです。その上、それが互たがい違ちがいに奥さんの心を支配するのでなくつて、いつでも両方が同時に奥さんの胸に存

在しているのだと思うようになったのです。つまり奥さんができるだけお嬢さんを私に接近させようとしていながら、同時に私に警戒を加えているのは矛盾のようだけれども、その警戒を加える時に、片方の態度を忘れるのでも翻すのでも何でもなく、やはり依然として二人を接近させたがつっていたのだと観察したのです。ただ自分が正当と認める程度以上に、二人が密着するのを忌むのだと解釈したのです。お嬢さんに対して、肉の方面から近づくと念の萌さきざなかつた私は、その時入らぬ心配だと思いました。しかし奥さんを悪く思う気

102
はそれからなくなりました。

十五

「私は奥さんの態度を色々そうじょう総合して見て、私がここの家で充分信用うちされている事を確かめました。しかもその信用は初対面の時からあつたのだという証拠さえ発見しました。他ひとを疑うたぐり始めた私の胸には、この発見が少し奇異なくらいに響いたので。私は男に比べると女の方がそれだけ直覚に富んでいるのだらうと思いました。同時に、女が男のために、欺だまされるのもここに

あるのではなからうかと思いました。奥さんをそう観察する私が、お嬢さんに対して同じような直覚を強く働かせていたのだから、今考えるとおかしいのです。私は他ひとを信じないと心に誓いながら、絶対にお嬢さんを信じていたのですから。それでいて、私を信じている奥さんを奇異に思ったのですから。

私は郷里の事について余り多くを語らなかつたのです。ことに今度の事件については何もいわなかつたのです。私はそれを念頭に浮べてさえすでに一種の不愉快を感じました。私はなるべく奥さんの方の話だけを

聞こうと力^{つと}めました。ところがそれでは向うが承知しません。何かにつけて、私の国元の事情を知りたがるのです。私はとうとう何もかも話してしまいました。私は二度と国へは帰らない。帰っても何にもない、あるのはただ父と母の墓ばかりだと告げた時、奥さんは大変感動したらしい様子を見せました。お嬢さんは泣きました。私は話して好^いい事をしたと思いました。私は嬉^{うれ}しかったのです。

私のすべてを聞いた奥さんは、はたして自分の直覚が的中したといわないばかりの顔をし出しました。そ

れからは私を自分の親戚みよりに当る若いものか何かを取り扱うように待遇するのです。私は腹も立ちませんでした。むしろ愉快に感じたくらいです。ところがそのうちに私の猜疑心さいぎしんがまた起つて来ました。

私が奥さんを疑りうたぐ始めたのは、ごく些細ささいな事からでした。しかしその些細な事を重ねて行くうちに、疑惑は段々と根を張つて来ます。私はどういう拍子かふと奥さんが、叔父おじと同じような意味で、お嬢さんを私に接近つとさせようと力めるのではないかと考え出したのです。すると今まで親切に見えた人が、急に狡猾こうかつな策略

家として私の眼に映じて来たのです。私は苦々しい唇にがにがを嘸かみました。

奥さんは最初から、無人ぶにんで淋さむしいから、客を置いて世話をするのだと公言していました。私もそれを嘘うそとは思いませんでした。懇意こんいになって色々打ち明け話を聞いた後あとでも、そこに間違まちがいはなかったように思われます。しかし一般の経済状態は大して豊ゆたかだというほどではありませんでした。利害問題から考えてみて、私と特殊の関係をつけるのは、先方にとって決して損ではなかったのです。

私はまた警戒を加えました。けれども娘に対して前
いったくらいの強い愛をもっている私が、その母に対
していくら警戒を加えたって何になるでしょう。私は
一人で自分を嘲笑ちやうしやうしました。馬鹿だなどいって、自分
を罵ののった事もあります。しかしそれだけの矛盾なら
いくら馬鹿でも私は大した苦痛も感ぜずに済んだので
す。私の煩悶はんもんは、奥さんと同じようにお嬢さんも策略
家ではなからうかという疑問に会って始めて起るので
す。二人が私の背後で打ち合せをした上、万事をやっ
ているのだらうと思うと、私は急に苦しくって堪たまらな

くなるのです。不愉快なわけではありません。絶体絶命のような行き詰まった心持になるのです。それでいて私は、一方にお嬢さんを固く信じて疑わなかったのです。だから私は信念と迷いの途中に立って、少しも動く事ができなくなってしまうました。私にはどつちも想像であり、またどつちも真実であつたのです。

十六

「私は相変らず学校へ出席していました。しかし教壇に立つ人の講義が、遠くの方で聞こえるような心持がしました。勉強もその通りでした。眼の中へはいる活字は心の底まで浸^しみ渡らないうちに烟^{けむ}のごとく消えて行くのです。私はその上無口になりました。それを二、三の友達が誤解して、冥想^{めいそう}に耽^{ふけ}つてでもいるかのよう

に、他^たの友達に伝えました。私はこの誤解を解こうと

はしませんでした。都合の好い仮面を人が貸してくれ
たのを、かえって仕合せしあわとして喜びました。それでも
時々は気が済まなかつたのでしよう、発作的に焦燥ほしやぎ
廻まわつて彼らを驚かした事もあります。

私の宿は人出入ひとでいりの少ない家うちでした。親類も多くは
ないようでした。お嬢さんの学校友達がときたま遊び
に来る事はありませんが、極きわめて小さな声で、いるの
だかいないのだから分らないような話をして帰つてしま
うのが常でした。それが私に対する遠慮からだとは、
いかな私にも気が付きませんでした。私の所へ訪ねて

来るものは、大した乱暴者でもありませんでしたけれども、宅うちの人に気兼きがねをするほどな男は一人もなかつたのですから。そんなところになると、下宿人の私は主人あるじのようなもので、肝心かんじんのお嬢さんがかえって食客いせうろうの位地いちちにいたと同じ事です。

しかしこれはただ思い出したついでに書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただそこにどうしてもよくない事が一つあつたのです。茶の間か、さもなければお嬢さんの室へやで、突然男の声が聞こえるのです。その声がまた私の客と違って、すこぶる低いのです。だ

から何を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らないほど、私の神経に一種の昂奮こうふんを与えるのです。私は坐すわつていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それともただの知り合いなのだろうかとまず考えて見るのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのはです。坐つていてそんな事の知れようはずがありません。そうかといって、起たつて行つて障子しょうじを開けて見る訳にはなおいきません。私の神経は震えるといふよりも、大きな波動を打つて私を苦しめます。私は

客の帰った後で、きつと忘れずにその人の名を聞きま
した。お嬢さんや奥さんの返事は、また極めて簡単で
した。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足り
るまで追窮するついきゆう勇氣をもっていなかったのです。権利
は無論もっていなかったのでしょう。私は自分の品格
を重んじなければならぬという教育から来た自尊心
と、現にその自尊心を裏切うらぎりしている物欲しかおつきそうな顔付
とを同時に彼らの前に示すのです。彼らは笑いました。
それが嘲笑ちやうしやうの意味でなくって、好意から来たものか、
また好意らしく見せるつもりなのか、私は即坐に解釈

の余地を見出し得ないほど落付を失つてしまふのです。
そうして事が済んだ後で、いつまでも、馬鹿にされた
のだ、馬鹿にされたんじやなかるうかと、何遍も心の
うちで繰り返すのです。

私は自由な身体でした。たとい学校を途中で已めよ
うが、またどこへ行つてどう暮らそうが、あるいはど
この何者と結婚しようが、誰とも相談する必要のない
位地に立っていました。私は思い切つて奥さんにお嬢
さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした
事がそれまでに何度となくありました。けれどもその

たびごとに私は躊躇ちゆうちゆうして、口へはとうとう出さずにしまつたのです。断られるのが恐ろしいからではありません。もし断られたら、私の運命がどう変化するか分りませんけれども、その代り今までとは方角の違つた場所に立つて、新しい世の中を見渡す便宜も生じて来るのですから、そのくらいの勇氣は出せば出せたのです。しかし私は誘おびき寄せられるのが厭いやでした。他の手ひとに乗るのは何よりも業腹ごうはらでした。叔父おじに欺だまされた私は、これから先どんな事があつても、人には欺だまされまいと決心したのです。

十七

「私が書物ばかり買うのを見て、奥さんは少し着物を拵こしらえろといいました。私は実際田舎いなかで織った木綿もめんものしかもつていなかったので。その頃ころの学生は絹いとの入はいった着物を肌に着けませんでした。私の友達に横浜よこはまの商人あきんどか何かなにで、宅うちはなかなか派出はでに暮くしているものがありました。そこへある時羽二重はふたえの胴着どうぎが配達どくぱいで届まいた事があります。すると皆みんなながそれを見て笑いま

した。その男は恥ずかしがって色々弁解しましたが、折角せつかくの胴着こうちやくを行李こうりの底へ放り込んで利用しないのです。それをまた大勢が寄つてたかつて、わざと着せました。すると運悪くその胴着しらみに蝨しらみがたかりました。友達はこちらようど幸さいわいとでも思つたのでしよう、評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩に出たついでに、根津ねづの大きな泥溝どぶの中へ棄すててしまいました。その時いつしよに歩いていた私は、橋の上に立って笑いながら友達の所作しよさを眺ながめていましたが、私の胸のどこにも勿体もったいないという気は少しも起りませんでした。

その頃から見ると私も大分大人だいぶんになつていました。

けれどもまだ自分で余所行よそゆきの着物を拵しらえるといふほど

の分別ぶんべつは出なかつたのです。私は卒業して髯ひげを生やす

時代が来なければ、服装の心配などはするに及ばない

ものだという変な考えをもつていたのです。それで奥

さんに書物は要いるが着物は要いらないといいました。奥

さんは私の買う書物の分量を知っていました。買った

本をみんな読むのかと聞くのです。私の買うものの中うち

には字引きもあります。当然眼を通すべきはずであ

りながら、頁ページさえ切つてないのも多少あつたのですか

ら、私は返事に窮しました。私はどうせ要らないものを買うなら、書物でも衣服でも同じだという事に気が付きました。その上私は色々世話になるという口実の下に、お嬢さんの気に入るような帯か反物たんものを買ってやりたかったのです。それで万事を奥さんに依頼しました。

奥さんは自分一人で行くとはいいません。私にもいつしよに来いと命令するのです。お嬢さんも行かなくてはいけないというのです。今と違った空気の中に育てられた私どもは、学生的身分として、あまり若い

女などといっしよに歩き廻る習慣をもつていなかっ
 たものです。その頃の私は今よりもまだ習慣の奴隷で
 たから、多少躊躇ちゆうちゆうしましたが、思い切つて出掛けま
 した。

お嬢さんは大層着飾っていました。地体じたいが色の白
 くせに、白粉おしろいを豊富に塗つたものだからなお目立ちま
 す。往来の人がじろじろ見てゆくのです。そうしてお
 嬢さんを見たものはきつとその視線をひるがえして、
 私の顔を見るのだから、変なものでした。

三人は日本橋にほんばしへ行つて買いたいものを買いました。

買う間にも色々気が変わるので、思ったより暇ひまがかかりました。奥さんはわざわざ私の名を呼んでどうだろうと相談をするのです。時々反物たんのものをお嬢さんの肩から胸へたて豎あに宛あてておいて、私に二、三步遠退とおのいて見てくれるというのです。私はそのたびごとに、それは駄目だめだとか、それはよく似合うとか、とにかく一人前の口を聞きました。

こんな事で時間が掛かつて帰りは夕飯ゆうめしの時刻になりました。奥さんは私に対するお礼に何かちそうご馳走ちそうするといつて、木原店きはらだなという寄席よせのある狭い横丁よこちようへ私を連れ

込みました。横丁も狭いが、飯を食わせる家も狭いものでした。この辺の地理を一向心得ない私は、奥さんの知識に驚いたくらいです。

我々は夜に入つて家へ帰りました。その翌日は日曜でしたから、私は終日室の中に閉じ籠つていました。月曜になつて、学校へ出ると、私は朝つぱらそうそう級友の一人から調戯われました。いつ妻を迎えたのかといつてわざとらしく聞かれるのです。それから私の細君は非常に美人だといつて賞めるのです。私は三人連で日本橋へ出掛けたところを、その男にどこかで見

られたものとみえます。

十八

「私は宅^{うち}へ帰つて奥さんとお嬢さんにその話をしました。奥さんは笑いました。しかし定めて迷惑だろうと。いつて私の顔を見ました。私はその時腹のなかで、男はこんな風^{ふう}にして、女から気を引いて見られるのかと思ひました。奥さんの眼は充分私にそう思わせるだけの意味をもつていたのです。私はその時自分の考へている通りを直截^{ちやくせつ}に打ち明けてしまえば好かつたかも知

れません。しかし私にはもう狐疑こぎという薩張さつぱりしない塊かたまりがこびり付いていました。私は打ち明けようとして、ひよいと留とまりました。そうして話の角度を故意に少し外そらしました。

私は肝心かんじんの自分というものを問題の中から引き抜いてしまいました。そうしてお嬢さんの結婚について、奥さんの意中を探ったのです。奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。しかしまだ学校へ出ているくらいで年が若いから、こちらではさほど急がないのだと説明しました。

奥さんは口へは出さないけれども、お嬢さんの容色に大分重きを置いていらっしゃるらしく見えました。極めようと思えばいつでも極められるんだからというような事さえ口外しました。それからお嬢さんより外ほかに子供がないうのも、容易に手離したがるならない原因げんいんになつていました。嫁にやるか、聶むこを取るか、それにさえ迷つていゝのではなからうかと思われるところもありました。

話しているうちに、私は色々の知識を奥さんから得たような気がしました。しかしそれがために、私は機会を逸いっしたと同様の結果に陥おちいつてしまいました。私

は自分について、ついに一言も口を開く事ができませんでした。私は好い加減なところで話を切り上げて、自分の室へ帰ろうとしました。

さつきまで傍そばにいて、あんまりだわとか何とかいつて笑ったお嬢さんは、いつの間にか向うの隅に行つて、背中をこつちへ向けていました。私は立とうとして振り返つた時、その後姿うしろすがたを見たのです。後姿だけで人間の心が読めるはずはありません。お嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。お嬢さんは戸棚を前にして坐すわっていました。

その戸棚の一尺しやくばかり開あいている隙間すきまから、お嬢さんは何か引き出して膝ひざの上へ置いて眺ながめているらしかったのです。私の眼はその隙間の端はじに、一昨日おととい買った反物たんものを見付け出しました。私の着物もお嬢さんのと同じ戸棚の隅に重ねてあつたのです。

私が何ともいわずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になつて、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ解わからないほど不意でした。それがお嬢さんを早く片付けた方が得策だろうかという意味だと判然はつきりした時、私

はなるべく緩ゆるくならな方がいいだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うといいました。

奥さんとお嬢さんと私の関係がこうなっている所へ、もう一人男が入り込まなければならぬ事になりました。その男がこの家庭の一員となつた結果は、私の運命に非常な変化を来きたしています。もしその男が私の生活の行路こうろを横切らなかつたならば、おそらくこういう長いものをあなたに書き残す必要も起らなかつたでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立つて、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同

じ事です。自白すると、私は自分でその男を宅^{うち}へ引張^{ひっぱ}つて来たのです。無論奥さんの許諾^{きよだく}も必要ですか
ら、私は最初何もかも隠さず打ち明けて、奥さんに頼
んだのです。ところが奥さんは止^よせといいました。私
には連れて来なければ済まない事情が充分あるのに、
止せという奥さんの方には、筋の立つた理屈はまるで
なかったのです。だから私は私の善^いいと思うところを
強^しいて断行してしまいました。

十九

「私はその友達の名をここにKと呼んでおきます。私
はこのKと小供こどもの時からなかよしの仲好でした。小供の時から
といえは断らないでも解っているでしょう、二人には
同郷の縁故があつたのです。Kは真宗しんしゅうの坊さんの子で
した。もつとも長男ではありません、次男でした。そ
れである医者ほんがんの所へ養子にやられたのです。私の生れ
た地方は大変本願寺派ほんがんじはの勢力の強い所でしたから、真

宗の坊さんは他のものに比べると、物質的に割が好かつたようです。一例を挙げると、もし坊さんに女の子があつて、その女の子が年頃としごろになつたとすると、檀家だんかのものが相談して、どこか適当な所へ嫁にやってくれます。無論費用は坊さんの懐ふところから出るものではありません。そんな訳で真宗寺しんしゅうでらは大抵有ゆう福ふくでした。

Kの生れた家も相応に暮らしていたのです。しかし次男を東京へ修業に出すほどの余力があつたかどうか知りません。また修業に出られる便宜があるので、養子の相談が纏まとまつたものかどうか、そこも私には分り

ません。とにかくKは医者の家へ養子に行つたのです。それは私たちがまだ中学にいる時の事でした。私は教場で先生が名簿を呼ぶ時に、Kの姓が急に變つていたので驚いたのを今でも記憶しています。

Kの養子先もかなりな財産家でした。Kはそこから学資を貰つて東京へ出て来たのです。出て来たのは私といつしよでなかつたけれども、東京へ着いてからは、すぐ同じ下宿に入りました。その時分は一つ室によく二人も三人も机を並べて寝起したものです。Kと私も二人で同じ間にいました。山で生捕られた動物が、

檻おりの中で抱き合いながら、外を睨にらめるようなものでしたろう。二人は東京と東京の人を畏おそれました。それでいて六畳の間まの中では、天下を睥睨へいげいするような事をいつていたのです。

しかし我々は真面目まじめでした。我々は実際偉くなるつもりでいたのです。ことにKは強かつたのです。寺に生れた彼は、常に精進しょうじんという言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉くこの精進しょうじんの一語で形容されるように、私には見えただけなのです。私は心のうちで常にKを畏敬いけいしていました。

Kは中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で、私を困らせました。これは彼の父の感化なのか、または自分の生れた家、すなわち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか、解りませ^{わか}ん。ともかくも彼は普通の坊さんよりは遥^{はる}かに坊さんらしい性格をもっていたように見受けられます。元来Kの養家^{ようか}では彼を医者にするつもりで東京へ出したのです。しかるに頑固な彼は医者にはならない決心をもつて、東京へ出て来たのです。私は彼に向つて、それでは養父母を欺^{あざむ}くと同じ事ではないかと詰^なりました。

大胆な彼はそうだと答えるのです。道のためなら、そのくらいの事をして構わないというのです。その時彼の用いた道という言葉は、おそらく彼にもよく解つていなかったでしょう。私は無論解つたとはいえませんが。しかし年の若い私たちには、この漠然ぼくぜんとした言葉が尊たつとく響いたのです。よし解らないにしても気高けだかい心持に支配されて、そちらの方へ動いて行こうとする意気組いきぐみに卑いやしいところの見えるはずはありません。私はKの説に賛成しました。私の同意がKにとってどのくらい有力であったか、それは私も知りません。一いち図ず

な彼は、たとい私がいくら反対しようとも、やはり自分の思い通りを貫いたに違いなかろうとは察せられま
す。しかし万一の場合、賛成の声援を与えた私に、多
少の責任ができてくるぐらいの事は、子供ながら私は
よく承知していたつもりです。よしその時にそれだけ
の覚悟がないにしても、成人した眼で、過去を振り返
る必要が起つた場合には、私に割り当てられただけの
責任は、私の方で帯びるのが至当しとうになるくらいな語気
で私は賛成したのです。

二十

「Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔をわたくしして、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れただけで構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。」

最初の夏休みにKは国へ帰りませんでした。駒込のこまごめ

ある寺の一間ひとまを借りて勉強するのだといっていました。

私が帰つて来たのは九月上旬でしたが、彼ははたして

おおがんのん

そば

と

こも

大観音の傍の汚い寺の中に閉じ籠こもっていました。彼の

座敷は本堂のすぐ傍の狭い室へやでしたが、彼はそこで自

分の思う通りに勉強ができたのを喜んでゐるらしく見

えました。私はその時彼の生活の段々坊さんらしく

なつて行くのを認めたとように思います。彼は手頸てくびに

珠数じゆずを懸けていました。私がそれは何のためだと尋ね

たら、彼は親指で一つ二つと勘定する真似まねをして見せ

ました。彼はこうして日に何遍なんべんも珠数の輪を勘定する

らしかったのです。ただしその意味は私には解りませ
 ん。円い輪になっっているものを一粒ずつ数えてゆけば、
 どこまで数えていっても終局はありません。Kはどん
 な所でどんな心持がして、爪繰る手を留めたでしょう。
 詰らない事ですが、私はよくそれを思うのです。

私はまた彼の室に聖書を見ました。私はそれまでに
 お経ききょうの名を度々彼の口から聞いた覚えがありますが、
 キリストキリストきょう
 基督教については、問われた事も答えられた例ためしもな
 かったのですから、ちよつと驚きました。私はその
 理由わけを訊ねずにはいられませんでした。Kは理由はな

いいいいました。これほど人の有難ありがたがる書物なら読むでみるのが当り前だろうともいいました。その上彼は機会があつたら、『コーラン』も読んでみるつもりだといいました。彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味をもっているようでした。

二年目の夏に彼は国から催促を受けてようやく帰りました。帰つても専門の事は何にもいわなかつたものとみえます。家うちでもまたそこに気が付かなかつたのです。あなたは学校教育を受けた人だから、こういう消息をよく解しているでしょうが、世間は学生の生活だ

の、学校の規則だのに関して、驚くべく無知なもので
す。我々に何でもない事が一向外部へは通じていませ
ん。我々はまた比較的内部の空気ばかり吸っているの
で、校内の事は細大ともに世の中に知れ渡っているは
ずだと思ひ過ぎる癖があります。Kはその点にかけて、
私より世間を知っていたのでしよう、澄ました顔でま
た戻つて来ました。国を立つ時は私もいつしよでした
から、汽車へ乗るや否いなやすぐどうだったとKに問いま
した。Kはどうでもなかつたと答えたのです。

三度目の夏はちようど私が永久に父母の墳墓の地を

去ろうと決心した年です。私はその時Kに帰国を勧めましたが、Kは応じませんでした。そう毎年家へ帰つて何をするのだというのです。彼はまた踏み留まつて勉強するつもりらしかったのです。私は仕方なしに一人で東京を立つ事にしました。私の郷里で暮らしたその二カ月間が、私の運命にとつて、いかに波瀾はらんに富んだものかは、前に書いた通りですから繰り返しません。私は不平と幽鬱ゆううつと孤独の淋さびしさを一つ胸むねに抱いだいて、九月に入いつてまたKに逢あいました。すると彼の運命もまた私と同様に変調を示していました。彼は私の知ら

ないうちに、養家先ようかさきへ手紙を出して、こつちから自分の詐いつわりを白状してしまつたのです。彼は最初からその覚悟でいたのだそうです。今更仕方がないから、お前の好きなものをやるより外ほかに途みちはあるまいと、向うにいわせるつもりもあつたのでしようか。とにかく大学へ入つてまでも養父母あやむを欺き通す気はなかつたらしいのです。また欺こうとしても、そう長く続くものではないと見抜いたのかも知れませんか。

二十一

「Kの手紙を見た養父は大変怒りました。親を騙すよ
うな不埒なものに学資を送る事はできないという厳し
い返事をすぐ寄こしたのです。Kはそれを私に見せま
した。Kはまたそれと前後して実家から受け取った
書翰しょかんも見せました。これにも前に劣らないほど厳しい
詰責きつせきの言葉がありました。養家先ようかさきへ対して済まないとい
う義理が加わっているからでもありませんようが、

こつちでも一切構わないと書いてありました。Kがこの事件のために復籍してしまうか、それとも他に妥協の道を講じて、依然養家に留まるか、そこはこれから起る問題として、差し当りどうかしなければならぬのは、月々に必要な学資でした。

私はその点についてKに何か考えがあるのかと尋ねました。Kは夜学校の教師でもするつもりだと答えました。その時分は今に比べると、存外世の中が寛ろいでいましたから、内職の口はあなたが考えるほど払底でもなかったのです。私はKがそれで充分やって行け

るだろうと考えました。しかし私には私の責任があります。Kが養家の希望に背そむいて、自分の行きたい道を行こうとした時、賛成したものは私です。私はそうかといつて手を拱こまぬいでいる訳にゆきません。私はその場で物質的の補助をすぐ申し出しました。するとKは一つも二もなくそれを跳はね付けました。彼の性格からいつて、自活の方が友達もとの保護の下に立つより遥はるかに快よく思われたのでしよう。彼は大学へはいった以上、自分一人ぐらいどうかできなければ男でないような事をいきました。私は私の責任を完まつとるために、Kの感情

を傷つけるに忍びませんでした。それで彼の思う通りにさせて、私は手を引きました。

Kは自分の望むような口をほどなく探し出しました。しかし時間を惜しむ彼にとって、この仕事がどのくらい辛かつたかは想像するまでもない事です。彼は今まで通り勉強の手をちつとも緩めずに、新しい荷を背負って猛進したのです。私は彼の健康を気遣いました。しかし剛気な彼は笑うだけで、少しも私の注意に取り合いませんでした。

同時に彼と養家との関係は、段々こん絡がって来ま

した。時間に余裕のなくなつた彼は、前のように私と話す機会を奪われたので、私はついにその顛末てんまつを詳しく聞かずにしまいました。解決のますます困難になつてゆく事だけは承知していました。人が仲に入つて調停を試みた事も知っていました。その人は手紙でKに帰国を促うながしたのですが、Kは到底駄目だめだといつて、応じませんでした。この剛情ごうじょうなところが、——Kは学年中で帰れないのだから仕方がないといいましたけれども、向うから見れば剛情でしょう。そこが事態をますます険悪にしたようにも見えました。彼は養家の感

情を害すると共に、実家の怒りいかも買うようになりまし
た。私が心配して双方を融和するために手紙を書いた
時は、もう何の効果ききめもありませんでした。私の手紙は
一言の返事ひとことさえ受けずに葬られてしまったのです。私
も腹が立ちました。今までも行掛り上ゆきがか、Kに同情して
いた私は、それ以後は理否を度外に置いてKの味方
をする気になりました。

最後にKはとうとう復籍に決しました。養家から出
してもらった学資は、実家で弁償する事になったので
す。その代り実家の方でも構わないから、これからは

勝手にしろというのです。昔の言葉でいえば、まあ勘当かんどうなのでしよう。あるいはそれほど強いものでなかつたかも知れませんが、当人はそう解釈していました。Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに継母けいぼに育てられた結果とも見る事ができるようです。もし彼の実の母が生きていたら、あるいは彼と実家との関係に、こうまで隔へだたりができずに済んだかも知れないと私は思うのです。彼の父はいうまでもなく僧侶そうりよでした。けれども義理堅い点において、むしろ武士さむらいに似たところがありはしないかと疑われます。

二十二

「Kの事件が一段落ついた後で、あと私は彼の姉の夫から長い封書を受け取りました。Kの養子に行つた先は、この人の親類に当るのですから、彼を周旋した時にも、彼を復籍させた時にも、この人の意見が重きをなしていたのだと、Kは私に話して聞かせました。

手紙にはその後Kがどうしているか知らせてくれと書いてありました。姉が心配しているから、なるべく

早く返事を貰もらいたたいという依頼も付け加えてありました。Kは寺を嗣ついだ兄よりも、他家たけへ縁づいたこの姉を好いていました。彼らはみんな一つ腹から生れた姉弟きょうだいですけれども、この姉とKとの間には大分だいぶん年齒との差があつたのです。それでKの小供こどもの時分には、継母ママよりもこの姉の方が、かえつて本当の母らしく見えたのでしよう。

私はKに手紙を見せました。Kは何ともいいませんでしたけれども、自分の所へこの姉から同じような意味の書状が二、三度来たという事を打ち明けました。

Kはそのたびに心配するに及ばないと答えてやったのだそうです。運悪くこの姉は生活に余裕のない家に片付いたために、いくらKに同情があつても、物質的に弟をどうしてもやる訳にも行かなかつたのです。

私はKと同じような返事を彼の義兄宛あてで出しました。その中うちに、万一の場合には私がどうしてもするから、安心するようにとという意味を強い言葉で書き現わしました。これは固もとより私の一存いちぞんでした。Kの行先ゆくさきを心配するこの姉に安心を与えようという好意は無論含まれていませんが、私を軽蔑けいべつしたとより外ほかに取りようのない

彼の実家や養家ようかに対する意地もあつたのです。

Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年なかごろ生の中頃になるまで、約一年半の間、彼は独力で己おのれを支えていったのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出ないの蒼蠅うるさい問題も手伝っていたでしょう。彼は段々感傷センチメンタル的になつて来たのです。時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で背負しよつて立っているような事をいいます。そうしてそれを打ち消せばすぐ激するのです。それから

自分の未来に横たわる光明しょうみやうが、次第に彼の眼を遠退とおのいて行くようにも思つて、いらいらするのです。学問をやり始めた時には、誰しも偉大な抱負をもつて、新しい旅のぼに上るのが常ですが、一年と立ち二年と過ぎ、もう卒業も間近になると、急に自分の足の運びのろの鈍いのに気が付いて、過半はそこで失望するのが当り前になつていきますから、Kの場合も同じなのですが、彼のあせ焦慮り方はまた普通に比べると遥はるかに甚はなはだしかつたのです。私はついに彼の気分を落ち付けるのが専一せんいちだと考えました。

私は彼に向つて、余計な仕事をするのは止せよといひました。そうして当分からだ身体を楽にして、遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告しました。剛情こうじょうなKの事ですから、容易に私のいう事などは聞くまいと、かねて予期していたのですが、實際いい出して見ると、思つたよりも説き落すのに骨が折れたので弱りました。Kはただ学問が自分の目的ではないと主張するのです。意志の力を養つて強い人になるのが自分の考えだといふのです。それにはなるべく窮屈な境遇にいらなくてはならないと結論するのです。普通の人から見れば、ま

るで酔興すいきょうです。その上窮屈な境遇にいる彼の意志は、ちつとも強くなつていないのです。彼はむしろ神経衰弱に罹かかつていているくらいなのです。私は仕方がないから、彼に向つて至極しごく同感であるような様子を見せました。自分もそういう点に向つて、人生を進むつもりだったとついいには明言しました。（もつともこれは私に取つてまんざら空虚な言葉でもなかったのです。Kの説を聞いていると、段々そういうところに釣り込まれて来るくらい、彼には力があつたのですから。最後に私はKといつしよに住んで、いつしよに向上の路みちを辿たどつ

て行きたいと発議ほつぎしました。私は彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪ひざまずく事をあえてしたのです。そうして漸やっとの事で彼を私の家に連れて来ました。

二十三

「私の座敷には控えの間まというような四畳が付属して
いました。玄関を上がって私のいる所へ通ろうとする
には、ぜひこの四畳を横切らなければならぬのだか
ら、実用の点から見ると、至極しごく不便な室へやでした。私は
ここへKを入れたのです。もつとも最初は同じ八畳に
二つ机を並べて、次の間を共有にして置く考えだつた
のですが、Kは狭苦しくつても一人でいる方が好いいと

いって、自分でそつちのほうを扱えらんだのです。

前にも話した通り、奥さんは私のこの所置しよぢに対して始めは不賛成ふさんせいだったのです。下宿屋げしやくやならば、一人より二人が便利だし、二人より三人が得えになるけれども、商売しょうばいでないのだから、なるべくなら止よめた方が好いいというのです。私が決して世話せわの焼ける人でないから構かまうまいというと、世話は焼けないでも、気心の知れない人は厭いやだと答えるのです。それでは今厄介やくかいになつている私わたしだつて同じ事ことではないかと詰なじると、私の気心きしんは初めはつめからよく分わつていると弁解べんげして已やまないのです。

私は苦笑しました。すると奥さんはまた理屈の方向を更かえます。そんな人を連れて来るのは、私のために悪いから止よせといひ直します。なぜ私のために悪いかと聞くと、今度は向うで苦笑するのです。

実をいうと私だつて強しいてKといつしよにいる必要はなかつたのです。けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきつとそれを受け取る時ちゆうちよに躊躇ちゆうちよするだろうと思つたのです。彼はそれほど独立心の強い男でした。だから私は彼を私の宅うちへ置いて、二人前ふたりまえの食料を彼の知らない間まにそつと奥さんの手に

渡そうとしたのです。しかし私はKの経済問題について、一言も奥さんいちごんに打ち明ける気はありませんでした。

私はただKの健康について云々うんぬんしました。一人で置くとますます人間が偏屈へんくつになるばかりだからといいました。それに付け足して、Kが養家ようかと折合おりあいの悪かった事や、実家と離れてしまった事や、色々話して聞かせました。私は溺れおぼれかかった人を抱いて、自分の熱を向うに移してやる覚悟で、Kを引き取るのだと告げました。そのつもりであたたかい面倒を見てやってくれと、奥さんにもお嬢さんにも頼みました。私はここまで来

て漸々奥さんを説き伏せたのです。しかし私から何にも聞かないKは、この顛末をまるで知らずにいました。私もかえってそれを満足に思つて、のっそり引き移つて来たKを、知らん顔で迎えました。

奥さんとお嬢さんは、親切に彼の荷物を片付ける世話や何かをしてくれました。すべてそれを私に対する好意から来たのだと解釈した私は、心のうちで喜びました。——Kが相変らずむっちりした様子をしているにもかかわらず。

私がKに向つて新しい住居の心持はどうだと聞いた

時に、彼はただ一言悪くないといつただけでした。私いちげんからいわせれば悪くないどころではないのです。彼の今までいた所は北向きの湿っぽい臭においのする汚い室へやでした。食物くいものも室相応そうおうに粗末でした。私の家へ引き移つた彼は、幽谷ゆうこくから喬木きやうぼくに移つた趣があつたくらいです。それをさほどに思う気色けしきを見せないのは、一つは彼の強情から来ているのですが、一つは彼の主張からも出ているのです。仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢ぜいたくをいうのをあたかも不道德のようにに考えていました。なまじい昔の高僧せうじゆだとか聖徒せいとだと

かの伝でんを読んだ彼には、ややともすると精神と肉体とを切り離したがる癖がありました。肉を鞭撻べんたつすれば靈の光輝が増すように感ずる場合さえあつたのかも知れません。

私はなるべく彼に逆さからわらない方針を取りました。私は水を日向ひなたへ出して溶とかす工夫をしたのです。今に融とけて温かい水になれば、自分で自分に気が付く時機が来るに違ちがひないと思つたのです。

二十四

「私は奥さんからそういう風ふうに取り扱われた結果、段々快活になつて来たのです。それを自覚していたから、同じものを今度はKの上に応用しようとして試みたのです。Kと私とが性格の上において、大分相違だいぶんのある事は、長く交際つきあつて来た私によく解わかつていましたけれども、私の神経がこの家庭に入つてから多少角かどが取れたごとく、Kの心もここに置けばいつか沈まる事がある

るだろうと考えたのです。

Kは私より強い決心を有している男でした。勉強も私の倍ぐらいいはしたでしょう。その上持つて生れた頭の質たちが私よりもずっとよかったです。後あとでは専門が違いましたから何ともいえませんが、同じ級あいだにいる間は、中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めていました。私には平生から何をしてでもKに及ばないという自覚うちがあつたくらいです。けれども私が強しいてKを私の宅うちへ引ひつ張ばつて来た時には、私の方がよく事理わきまを弁わえていると信じていました。私にいわせると、

彼は我慢と忍耐の区別を了解していないように思われたのです。これはとくにあなたのために付け足しておきたいのですから聞いて下さい。肉体なり精神なりすべて我々の能力は、外部の刺戟しげきで、発達もするし、破壊されもするでしょうが、どつちにしても刺戟を段々に強くする必要のあるのは無論ですから、よく考えないと、非常に険悪な方向へむいて進んで行きながら、自分はもちろん傍はたのものも気が付かずにいる恐れが生じてきます。医者の説明を聞くと、人間の胃袋ほど横着なものはないそうです。粥かゆばかり食っていると、そ

れ以上の堅いものを消化こなす力がいつの間にかなくなつてしまふのだそうです。だから何でも食う稽古けいこをしておくと医者はいうのです。けれどもこれはただ慣れるという意味ではなからうと思います。次第に刺戟を増すに従つて、次第に營養機能の抵抗力が強くなるという意味でなくてはなりません。もし反対に胃の力の方がじりじり弱つて行つたなら結果はどうなるだろうと想像してみればすぐ解わかる事です。Kは私より偉大な男でしたけれども、全くここに気が付いていなかったのです。ただ困難に慣れてしまえば、しまいにその困

難は何でもなくなるものだと極きめていたらしいのです。艱かん苦を繰り返せば、繰り返すというだけの功徳くどくで、その艱苦が気にかからなくなる時機めぐりあに邂逅めぐりあえるものと信じ切っていたらしいのです。

私はKを説くときに、ぜひそこを明らかにしてやりたかったのです。しかしいえばきつと反抗ひきあされるに極きまっていました。また昔の人の例などを、引合ひきあに持つて来るに違いないと思いました。そうなれば私だつて、その人たちとKと違っている点を明白に述べなければならなくなります。それを首肯うけがつてくれるようなKな

らしいのですけれども、彼の性質として、議論がそこ
までゆくと容易に後へは返りませぬ。あとなお先へ出ます。
そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しに掛りかか
ます。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。
自分で自分を破壊しつつ進みます。結果から見れば、
彼はただ自己の成功を打ち砕く意味において、偉大な
のに過ぎないのですけれども、それでも決して平凡で
はありませんでした。彼の気性きしょうをよく知った私はい
に何ともいう事ができなかつたのです。その上私から
見ると、彼は前にも述べた通り、多少神経衰弱に罹かかつ

ていたように思われたのです。よし私が彼を説き伏せたとところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩けんかをする事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪たえなかつた自分の境遇を顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取つて忍びない事でした。一步進んで、より孤独な境遇に突き落すのはなお厭いやでした。それで私は彼が宅うちへ引き移つてからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。ただ穏やかに周囲の彼に及ぼす結果を見る事にしたのです。

二十五

「私は蔭^{かげ}へ廻^{まわ}つて、奥さんとお嬢さんに、なるべくKと話をするようになり頼みました。私は彼のこれまで通つて来た無言生活が彼に祟^{たた}つているのだらうと信じたからです。使わない鉄が腐るように、彼の心には錆^{さび}が出ていたとしか、私には思われなかつたのです。

奥さんは取り付き把^はのない人だといつて笑つていました。お嬢さんはまたわざわざその例を挙げて私に説

明して聞かせるのです。火鉢に火があるかと尋ねると、Kはないと答えるそうです。では持つて来きようという
と、要いらないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、
寒いけれども要いらないんだといったぎり応対をしない
のだそうです。私はただ苦笑している訳にもゆきませ
ん。気の毒だから、何とかいってその場を取り繕つくろって
おかなければ済まなくなります。もつともそれは春の
事ですから、強しいて火にあたる必要もなかったのです
が、これでは取り付き把がないといわれるのも無理は
ないと思いました。

それで私はなるべく、自分が中心になつて、女二人とKとの連絡をはかるように力めました。Kと私が話している所へ家の人うちを呼ぶとか、または家の人と私が一つ室へやに落ち合った所へ、Kを引つ張り出すとか、どつちでもその場合に応じた方法をとつて、彼らを接近させようとしたのです。もちろんKはそれをあまり好みませんでした。ある時はふいと起たつて室の外へ出ました。またある時はいくら呼んでもなかなか出て来ませんでした。Kはあんな無駄話むだばなしをしてどこが面白いというのです。私はただ笑っていました。しかし心の

中^{うち}では、Kがそのために私を軽蔑^{けいべつ}していることがよく解^{わか}りました。

私はある意味から見て実際彼の軽蔑^{あたい}に価^{あたい}していたかも知れません。彼の眼の着け所は私より遙^{はる}かに高いところにあつたともいわれるでしょう。私もそれを否^{いな}みはしません。しかし眼だけ高くつて、外^{ほか}が釣り合わないのは手もなく不具^{かたわ}です。私は何を措^おいても、この際彼を人間らしくするのが専一^{せんいつ}だと考えたのです。いくら彼の頭が偉い人の影像^{イメジ}で埋^{うず}まっても、彼自身が偉くなつてゆかない以上は、何の役にも立たないとい

う事を発見したのです。私は彼を人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍そばに彼を坐すわらせる方法を講じたのです。そうしてそこから出る空気に彼を曝さらした上、錆さび付きかかった彼の血液を新しくしようとして試みたのです。

この試みは次第に成功しました。初めのうち融合しにくいように見えたものが、段々一つに纏まとまって来出きだしました。彼は自分以外に世界のある事を少しずつ悟わつてゆくようでした。彼はある日私に向つて、女はそう軽蔑けいべつすべきものでないというような事をいいまし

た。Kははじめ女からも、私同様の知識と学問を要求していったらしいのです。そうしてそれが見付からないと、すぐ軽蔑の念を生じたものと思われます。今まで
の彼は、性によつて立場を変える事を知らずに、同じ視線ですべての男女なんによを一樣に観察していたのです。私は彼に、もし我ら二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうといいました。彼はもつともだと答えました。私はその時お嬢さんの事で、多少夢中になつている頃ころでしたから、自然そんな言葉も使うよう

になったのでしよう。しかし裏面の消息は彼には一口ひとくちも打ち明けませんでした。

今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠こもつていたようなKの心が、段々打ち解けて来るのを見ているのは、私に取って何よりも愉快でした。私は最初からそうした目的で事をやり出したのですから、自分の成功に伴う喜びを感じずにはいられなかつたのです。私は本人にいわない代りに、奥さんとお嬢さんに自分の思つた通りを話しました。二人も満足の様子でした。

二十六

「Kと私は同じ科わたくしにおりながら、専攻の学問が違つて
いましたから、自然出る時や帰る時に遅速がありました。
た。私の方が早ければ、ただ彼の空室くうしつを通り抜けるだ
けですが、遅いと簡単な挨拶あいさつをして自分の部屋へはい
るのを例にしていました。Kはいつもの眼を書物から
はなして、襖ふすまを開ける私をちよつと見ます。そうして
きつと今帰つたのかといいます。私は何も答ええないで

うなず
點頭く事もありませんし、あるいはただ「うん」と答えて
行き過ぎる場合もあります。

ある日私は神田かんだに用があつて、帰りがいつもより
ずっと後おくれました。私は急ぎ足に門前まで来て、格子
をがらりと開けました。それと同時に、私はお嬢さん
の声を聞いたのです。声は慥たしかにKの室へやから出たと思
いました。玄関から真直まっすぐに行けば、茶の間、お嬢さん
の部屋と二つ続いていて、それを左へ折れると、Kの
室、私の室、という間取まどりなのですから、どこで誰の声
がしたくらいは、久しく厄介やっかいになっている私にはよく

分るのです。私はすぐ格子を締めました。するとお嬢さんの声もすぐ已やみました。私が靴を脱いでいるうち、——私はその時分からハイカラで手数てかずのかかる編上あみあげを穿はいていたのですが、——私がごこんでその靴紐くつひもを解はいているうち、Kの部屋では誰の声もしませんでした。私は変に思いました。ことによると、私の疝かんちがい違ちがいかも知れないと考えたのです。しかし私がいつもの通りKの室を抜けようとして、襖を開けると、そこに二人はちやんと坐すわっていました。Kは例の通り今帰ったかといいました。お嬢さんも「お帰り」と坐すわったまままで挨あ

撈しました。私には気のせいとかその簡単な挨拶が少し硬い^{かた}ように聞こえました。どこかで自然を踏み外^{はず}しているような調子として、私の鼓膜^{こまく}に響いたのです。私はお嬢さんに、奥さんはと尋ねました。私の質問には何の意味もありませんでした。家のうちが平常より何だかひっそりしていたから聞いて見ただけの事です。奥さんははたして留守でした。下女^{げじょ}も奥さんといつしよに出たのでした。だから家^{うち}に残っているのは、Kとお嬢さんだけだったのです。私はちよつと首を傾けました。今まで長い間世話になつていたけれども、奥

さんがお嬢さんと私だけを置き去りにして、宅うちを空けた例ためしはまだなかつたのですから。私は何か急用でもできたのかとお嬢さんに聞き返しました。お嬢さんはただ笑っているのです。私はこんな時に笑う女が嫌いでした。若い女に共通な点だといえればそれまでかも知れませんが、お嬢さんも下らない事によく笑いたがる女でした。しかしお嬢さんは私の顔色を見て、すぐ不ふだん断の表情に帰りました。急用ではないが、ちよつと用があつて出たのだと真ま面目じめに答えました。下宿人の私にはそれ以上問い詰める権利はありません。私は沈黙し

ました。

私が着物を改めて席に着くか着かないうちに、奥さんも下女も帰って来ました。やがて晩食ばんめしの食卓でみんなが顔を合わせる時刻が来ました。下宿した当座は万事客扱いだったので、食事のたびに下女が膳ぜんを運んで来てくれたのですが、それがいつの間にか崩れて、飯時めしどきには向うへ呼ばれて行く習慣になっていたのです。Kが新しく引き移った時も、私が主張して彼を私と同じように取り扱わせる事に極きめました。その代り私は薄い板で造った足の畳たたみ込める華奢きゃしゃな食卓を奥さんに

寄附きふしました。今ではどこの宅うちでも使っているようですが、その頃ころそんな卓の周囲に並んで飯を食う家族はほとんどなかったのです。私はわざわざ御茶おちやの水みずの家具屋へ行って、私の工夫通りにそれを造り上げあさせたのです。

私はその卓上で奥さんからその日いつもの時刻に着屋さかなやが来なかつたので、私たちに食わせるものを買いに町へ行かなければならなかつたのだという説明を聞かされました。なるほど客を置いている以上、それももつともな事だと私が考えた時、お嬢さんは私の顔を

見てまた笑い出しました。しかし今度は奥さんに叱しかられてすぐ已やめました。

二十七

「一週間ばかりして私はまたKとお嬢さんがいつしよ
に話している室へやを通り抜けました。その時お嬢さんは
私の顔を見るや否いなや笑い出しました。私はすぐ何がお
かしいのかと聞けばよかつたのでしよう。それをつい
黙って自分の居間まで来てしまったのです。だからK
もいつものように、今帰ったかと声を掛ける事ができ
なくなりました。お嬢さんはすぐ障子しょうじを開けて茶の間

へ入ったようでした。

ゆうめし

夕飯の時、お嬢さんは私を変な人だといいました。

私はその時もなぜ変なのか聞かずにしまいました。ただ奥さんがにら睨めるような眼をお嬢さんに向けると気が付いただけでした。

私は食後Kを散歩に連れ出しました。二人はでんずういん伝通院

の裏手から植物園の通りをぐるりと廻まわつてまたとみざか富坂の

下へ出ました。散歩としては短い方ではありません。

したが、その間あいだに話した事は極きわめて少なかつたのです。

性質からいうと、Kは私よりも無口な男でした。私も

多弁な方ではなかつたのです。しかし私は歩きながら、できるだけ話を彼に仕掛^{しか}けてみました。私の問題はおもに二人の下宿している家族についてでした。私は奥さんやお嬢さんを彼がどう見ているか知りたかつたのです。ところが彼は海のものとも山のものとも見^み分けの付かないような返事ばかりするのです。しかもその返事は要領を得ないくせに、極めて簡単でした。彼は二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っているように見^みえました。もつともそれは二学年目の試験が目の前に逼^{せま}っている頃^{ころ}でしたから、普

通の人間の立場から見て、彼の方が学生らしい学生だつたのでしよう。その上彼はシュエデンボルグがどうだとかこうだとかいって、無学な私を驚かせました。我々が首尾よく試験を済ませました時、二人とももう後一年だといつて奥さんは喜んでくれました。そういう奥さんの唯一ゆいいつの誇りほことも見られるお嬢さんの卒業も、間もなく来る順になつていたのです。Kは私に向つて、女というものは何にも知らないで学校を出るのだといいました。Kはお嬢さんが学問以外に稽古けいこしている縫針ぬいはりだの琴いけばなだの活花いけばなだのを、まるで眼中に置い

ていないようでした。私は彼の迂闊うかつを笑ってやりました。そうして女の価値はそんな所にあるものでないという昔の議論をまた彼の前で繰り返しました。彼は別段反駁はんぱくもしませんでした。その代りなるほどという様子も見せませんでした。私にはそこが愉快でした。彼のふんといったような調子が、依然として女を軽蔑けいべつしているように見えたからです。女の代表者として私の知っているお嬢さんを、物の数かずとも思っていないらしかったからです。今から回顧きこすると、私のKに対する嫉妬しつとは、その時にもう充分萌きざしていたのです。

私は夏休みにどこかへ行こうかとKに相談しました。Kは行きたくないような口振くちぶりを見せました。無論自分は自分の自由意志でどこへも行ける身体からだではありませんが、私が誘いさえすれば、またどこへ行つても差支さしつかえのない身体だったのです。私はなぜ行きたくないのかと彼に尋ねてみました。彼は理由も何にもないというのです。宅うちで書物を読んだ方が自分の勝手だというのです。私が避暑地へ行つて涼しい所で勉強した方が、身体のためだと主張すると、それなら私一人行つたらよかろうというのです。しかし私はK一人をここに残し

て行く気にはなれないのです。私はただでさえKと宅のものが段々親しくなつて行くのを見ているのが、余り好いい心持ではなかつたのです。私が最初希望した通りになるのが、何で私の心持を悪くするのかといわれればそれまでです。私は馬鹿に違ちがひないのです。果はてしつかない二人の議論を見るに見かねて奥さんが仲へ入りました。二人はとうとういっしょに房州ぼうしゅうへ行く事になりました。

二十八

「Kはあまり旅へ出ない男でした。私にもわたくし房州は始めぼうしゅうてでした。二人は何にも知らないで、船が一番先へ着いた所から上陸したのです。たしか保田ほたとかいいました。今ではどんなに変わっているか知りませんが、その頃ころろはひどい漁村でした。第一だいちどこもかしこも腥なまぐさいのです。それから海へ入ると、波に押し倒されて、すぐ手だの足だのを擦すり剥むくのです。拳こぶしのような大きな石が

打ち寄せる波に揉もまれて、始終ごろごろしているのです。

私はすぐ厭いやになりました。しかしKは好いいとも悪いともいいません。少なくとも顔付かおつきだけは平気なものでした。そのくせ彼は海へ入るたんびにどこかに怪け我がをしない事はなかつたのです。私はとうとう彼を説き伏せて、そこから富浦とみうらに行きました。富浦からまた那古なこに移りました。すべてこの沿岸はその時分から重おもに学生ていせいの集まる所でしたから、どこでも我々にはちようど手頃ていごの海水浴場だったのです。Kと私はよく海岸の岩

の上に坐すわつて、遠い海の色や、近い水の底を眺ながめま
 した。岩の上から見下みおろす水は、また特別に綺麗きれいなもので
 した。赤い色だの藍あいの色だの、普通市場しじょうに上のぼらないよ
 うな色をした小魚こうおが、透き通る波の中をあちらこちら
 と泳いでいるのが鮮やかに指さされました。

私はそこに坐すわつて、よく書物をひろげました。Kは
 何もせずに黙もくつていてる方が多かったので。私にはそ
 れが考えに耽ふけつていてるのか、景色に見惚みとれていてるのか、
 もしくは好きな想像を描えがいていてるのか、全く解わからな
 かったのです。私は時々眼を上げて、Kに何をしてい

るのだと聞きました。Kは何もしていないと一口答えるだけでした。私は自分の傍そばにこうじつとして坐っているものが、Kでなくって、お嬢さんだつたらさぞ愉快だろうと思う事がよくありました。それだけならまだいいのですが、時にはKの方でも私と同じような希望を抱いだいて岩の上に坐っているのではないかしらと忽然こつぜん疑い出すのです。すると落ち付いてそこに書物をひろげているのが急に厭になります。私は不意に立ち上あがります。そうして遠慮のない大きな声を出して怒鳴どなります。纏まとまった詩だの歌だのを面白おもしろそうに吟ぎんずるよ

うな手てぬる緩い事はできないのです。ただ野蛮人のごとくにわめくのです。ある時私は突然彼の襟えりくび頸を後ろからぐいと攫つかみました。こうして海の中へ突き落したらどうするといつてKに聞きました。Kは動きませんでした。後ろ向きのまま、ちようど好いい、やつてくれと答えました。私はすぐ首筋を抑おさえた手を放しました。

Kの神経衰弱はこの時もう大分だいぶんよくなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になつて来ていたのです。私は自分より落ち付いているKを見て、羨うらやましがりました。また憎らしがりました。彼

はどうしても私に取り合う気色けしきを見せなかつたからです。私にはそれが一種の自信のごとく映りました。しかしその自信を彼に認めたとこで、私は決して満足できなかつたのです。私の疑いはもう一步前へ出て、その性質を明あきらめたがりました。彼は学問なり事業なりについて、これから自分の進んで行くべき前途の光明こうみやうを再び取り返した心持になつたのだろうか。単にそれだけならば、Kと私との利害に何の衝突の起る訳はないのです。私はかえつて世話のし甲が斐いがあつたのを嬉うれしく思うくらいなものです。けれども彼の安心が

もしお嬢さんに対してであるとするれば、私は決して彼を許す事ができなくなるのです。不思議にも彼は私のお嬢さんを愛している素振そぶりに全く気が付いていないように見えしました。無論私もそれがKの眼に付くようにわざとらしくは振舞いませんでしたけれども。Kは元来そういう点にかけると鈍にぶい人なのです。私には最初からKなら大丈夫という安心があつたので、彼をわざうちわざ宅へ連れて来たのです。

二十九

「私は思い切つて自分の心をKに打ち明けようと思
しました。もつともこれはその時に始まつた訳でもなかつ
たのです。旅に出ない前から、私にはそうした腹がで
きていたのですけれども、打ち明ける機会をつらまえ
る事も、その機会を作り出す事も、私の手際では旨く^{てぎわ}
ゆかなかつたのです。今から思うと、その頃私の周囲
にいた人間はみんな妙でした。女に関して立ち入つた

話などをするものは一人もありませんでした。中には話す種たねをもたないのも大分だいぶいたでしょうが、たといもつていても黙っているのが普通のようにでした。比較的自由な空気を呼吸している今のあなたがたから見たら、定めし変に思われるでしょう。それが道学どうがくの余習よしゅうなのか、または一種のはにかみなのか、判断はあなたの理解に任せておきます。

Kと私は何でも話し合える中でした。偶たまには愛とか恋とかいう問題も、口くちに上のぼらないではありませんでしたが、いつでも抽象的な理論に落ちてしまっただけでし

た。それも滅多には話題にならなかつたのです。大抵は書物の話と学問の話と、未来の事業と、抱負と、修養の話ぐらいで持ち切っていたのです。いくら親しくつてもこう堅くなつた日には、突然調子を崩せるものではありません。二人はただ堅いなりに親しくなるだけです。私はお嬢さんの事をKに打ち明けようと思ひ立つてから、何遍齒なんべんがゆい不快に悩まされたか知れませんが。私はKの頭のどこか一カ所を突き破つて、そこから柔らかい空気を吹き込んでやりたい気がしました。

あなたがたから見て笑止千万しょうしせんばんな事もその時の私には
実際大困難ひきようだったのです。私は旅先でも宅うちにいた時と
同じように卑怯ひきようでした。私は始終機会を捕える気でK
を観察していながら、変に高踏的な彼の態度をどうす
る事もできなかつたのです。私にいわせると、彼の心
臓の周囲は黒い漆うるしで重く塗り固められたのも同然でし
た。私の注そそぎ懸かけようとすする血潮は、一滴もその心臓
の中へは入らないで、悉ことごとく弾はじき返されてしまうのです。
或ある時はあまりKの様子が強くて高いので、私はか
えって安心した事もあります。そうして自分の疑いを

腹の中で後悔すると共に、同じ腹の中で、Kに詫わびました。詫わびながら自分が非常に下等な人間のように見えて、急に厭いやな心持になるのです。しかし少時しばらくすると、以前の疑いがまた逆戻りをして、強く打ち返して来ます。すべてが疑いから割り出されるのですから、すべてが私には不利益でした。容貌ようぼうもKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしていないところが、異性には気に入るだろうと思われました。どこか間まが抜けていて、それでどこかに確しつかりした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見え

ました。学力がくりきになれば専門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——すべて向うの好いいところだけがこう一度に眼先めさきへ散らつき出すと、ちよつと安心した私はすぐ元の不安に立ち返るのです。

Kは落ち付かない私の様子を見て、厭いやならひとまず東京へ帰つてもいいといつたのですが、そういわれると、私は急に帰りたくなくなりました。実はKを東京へ帰したくなかつたのかも知れませんが。二人は房州ぼうしゅうの鼻を廻まわつて向う側へ出ました。我々は暑い日に射いられながら、苦しい思いをして、上総かずさのそこ一里いちりに騙だまされ

ながら、うんうん歩きました。私にはそうして歩いて
いる意味がまるで解わからなかつたくらいです。私は
冗談じょうだん半分Kにそういいました。するとKは足がある
から歩くのだと答えました。そうして暑くなると、海
に入つて行こうといつて、どこでも構しおわず潮つかへ漬りま
した。その後あとをまた強い日で照り付けられるのですか
ら、身体からだが倦だる怠るくてぐたぐたになりました。

三十

「こんな風ふうにして歩いてみると、暑さと疲労とで自然
身体からだの調子が狂つて来るものです。もつとも病気とは
違います。急に他ひとの身体の中へ、自分の靈魂たまごが宿替やどがえを
したような気分になるのです。私は平生わたくしへいぜいの通りKと口
を利ききながら、どこかで平生の心持と離れるようにな
りました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中りよちゆう限りかぎと
いう特別な性質せいかくを帯おびる風になったのです。つまり二

人は暑さのため、潮しおのため、また歩行のため、在来と異なつた新しい関係に入る事ができたのでしよう。その時の我々はあたかも道づれになつた行商ぎやうしやうのようなものでした。いくら話をしてもいつもと違つて、頭を使う込み入つた問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚子ちやうしまで行つたのですが、道中たつた一つの例外があつたのを今に忘れる事ができないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊こみなとという所で、鯛たいの浦うらを見物しました。もう年数ねんすうもよほど経たっていますし、それに私にはそれほど興味の無い事

ですから、判然はんぜんとは覚えていませんが、何でもそこは日蓮にちれんの生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯びいそに打ち上げられていたとかいう言伝いいつたえになつていゝのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至つたのだから、浦には鯛が沢山いるのです。我々は小舟を傭やとつて、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一函いちずに波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかつた鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほど

それに興味をもち得なかつたものとみえます。彼は鯛よりもかえって日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。ちようどそこに誕生寺たんじじょうじという寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍がらんでした。Kはその寺に行つて住持じゆうじに会つてみるといい出しました。実をいうと、我々はずいぶん変な服装なりをしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠すげがさを買つて被かぶつていました。着物は固もとより双方とも垢あかじみた上に汗あせで臭くさくなつていました。私は坊さんなどに会

うのは止よそうといいました。Kは強情じょうじょうだから聞きませ
ん。厭いやなら私だけ外に待っているというのです。私は
仕方がないからいつしよに玄関にかかりましたが、心
のうちではきつと断られるに違いないと思っ
ていました。ところが坊さんというものは案外ていねい丁寧なもので、
広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会っ
てくれました。その時分の私はKと大分だいぶん考えが違っ
ていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起
りませんでした。Kはしきりに日蓮の事を聞いてい
たようです。日蓮は草日蓮そうにちれんといわれるくらいで、草書そうしょ

が大変上手であつたと坊さんがいつた時、字の拙ますいKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知りたかつたのでしよう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内けいだいを出ると、しきりに私に向つて日蓮の事を云々うんぬんし出しました。私は暑くて草臥くたびれて、それどころではありませんでした。だから、ただ口の先で好いい加減な挨拶あいさつをしていました。それも面倒になつてしまひには全く黙つてしまつたのです。

たしかその翌る晩の事だと思いますが、二人は宿へ着いて飯を食って、もう寝ようという少し前になってから、急にむずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私
が取り合わなかったのを、快く思っていないなかったので
す。精神的に向上心がないものは馬鹿だといって、何
だか私をさも軽薄もののようにやり込めるのです。と
ころろが私の胸にはお嬢さんの事が蟠わだかまっていますから、
彼の侮蔑ぶべつに近い言葉をただ笑って受け取る訳にいきま
せん。私は私で弁解を始めたのです。

三十一

「その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠しているというのです。なるほど後から考えれば、Kのいう通りでした。しかし人間らしくない意味をKに納得させるためにその言葉を使い出した私には、しゅったつてん出立点がすでに反抗的でしたから、それを反省するような余裕はありません。私はなおの

事自説を主張しました。するとKが彼のどこをつらまえて人間らしくないというのかと私に聞くのです。私は彼に告げました。——君は人間らしいのだ。あるいは人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事をいうのだ。また人間らしくないように振舞おうとするのだ。

私がこういつた時、彼はただ自分の修養が足りないから、他ひとにはそう見えるかも知れないと答えただけで、一向私を反駁はんぱくしようとしませんでした。私は張合いが抜けたというよりも、かえって気の毒になりました。

私はすぐ議論をそこで切り上げました。彼の調子もだんだん沈んで来ました。もし私が彼の知っている通り昔の人を知るならば、そんな攻撃はしないだろうと、いつて悵然ちやうぜんとしていました。Kの口にした昔の人とは、無論英雄でもなければ豪傑でもないのです。霊のために肉を虐しいたげたり、道のために体を鞭むちうったりしたいわゆる難行苦行なんぎようくぎようの人を指すのです。Kは私に、彼がどのくらいそのために苦しんでいるか解わからないのが、いかにも残念だと明言しました。

Kと私とはそれぎり寝てしまいました。そうしてそ

の翌あくる日からまた普通の行商ぎやうしやうの態度に返つて、うんうん汗を流しながら歩き出したのです。しかし私は路々みちみちその晩の事をひよいひよいと思い出しました。私にはこの上もない好いい機会が与えられたのに、知らない振ふりをしてなぜそれをやり過ぎしたのだろうという悔恨の念が燃えたのです。私は人間らしいという抽象的な言葉を用いる代りに、もつと直截ちやくせつで簡単な話をKに打ち明けてしまえば好かつたと思ひ出したのです。実をいうと、私がそんな言葉を創造したのも、お嬢さんに対する私の感情が土台になつていたのですから、事実

を蒸溜して拵こしらえた理論などをKの耳に吹き込むよりも、

もと かたち

原の形そのままを彼の眼の前に露出した方が、私には

たしかに利益だったでしょう。私にそれができなかつ

たのは、学問の交際が基調を構成している二人の親し

みに、自おのずから一種の惰性があつたため、思い切つてそ

れを突き破るだけの勇気が私に欠けていたのだという

事をここに自白します。気取り過ぎたといつても、虚

栄心たたが祟たたつたといつても同じでしょうが、私のいう気

取るとか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違いま

す。それがあなたに通じさえすれば、私は満足なので

す。

我々は真黒になつて東京へ帰りました。帰つた時は私の気分がまた変つていました。人間らしいとか、人間らしくないとかいう小理屈こりくつはほとんど頭の中に残つていませんでした。Kにも宗教家らしい様子が全く見えなくなりました。おそらく彼の心のどこにも霊がどこの肉がどうのという問題は、その時宿つていなかつたでしょう。二人は異人種のような顔をして、忙しそうに見える東京をぐるぐる眺めながました。それから両国りょうごくへ来て、暑いのに軍鶏しやもを食いました。Kはその勢いいきおいで

小石川まで歩いて帰ろうというのです。体力からい

えばKよりも私の方が強いのですから、私はすぐ応じました。

宅へ着いた時、奥さんは二人の姿を見て驚きました。二人はただ色が黒くなっただけでなく、むやみに歩いていたらうちに大変瘠せてしまったのです。奥さんはそれでも丈夫そうになったと行って賞めてくれるのです。お嬢さんは奥さんの矛盾がおかしいと行ってまた笑い出しました。旅行前時々腹の立った私も、その時だけは愉快的な心持がしました。場合が場合なのと、久

しぶりに聞いたせいでしよう。

三十二

「それのみならずわたくし私はお嬢さんの態度の少し前と変つて
いるのに気が付きました。久しぶりで旅から帰つた
私たちが平生へいぜいの通り落ち付くまでには、万事について
女の手が必要だつたのですが、その世話をしてくれる
奥さんはとにかく、お嬢さんがすべて私の方を先にし
て、Kを後廻しあとまわにするように見えたのです。それを露
骨にやられては、私も迷惑したかもしれません。場合

によつてはかえつて不快の念さえ起しかねなかつたろうと思つたのですが、お嬢さんの所作しよさはその点で甚だ要領を得ていたから、私は嬉うれしかったです。つまりお嬢さんは私だけに解わかるように、持前もちまえの親切を余分に私の方へ割り宛あててくれたのです。だからKは別に厭いやな顔もせず平気でいました。私は心の中うちでひそかに彼に対する愷歌がいかを奏しました。

やがて夏も過ぎて九月の中頃なかごろから我々はまた学校の課業に出席しなければならぬ事になりました。Kと私とは各自てんでんの時間の都合で出入りの刻限にまた遅速が

できてきました。私がKより後おくれて帰る時は一週に三度ほどありましたが、いつ帰つてもお嬢さんの影をKの室へやに認める事はないようになりました。Kは例の眼を私の方に向けて、「今帰つたのか」を規則のごとく繰り返しました。私の会釈もほとんど器械のごとく簡単でかつ無意味でした。

たしか十月の中頃と思います。私は寝坊ねぼうをした結果、日本服にほんふくのまま急いで学校へ出た事があります。穿物はきものも編上あみあげなどを結んでいる時間が惜しいので、草履ぞうりを突っかけたなり飛び出したのです。その日は時間割からい

うと、Kよりも私の方が先へ帰るはずになっていました。私は戻って来ると、そのつもりで玄関の格子こうしをがらりと開けたのです。するといないと思っていたKの声こゑがひよいと聞こえました。同時にお嬢さんの笑い声わらひこゑが私の耳みみに響ひびきました。私はいつものように手数てかずのかかる靴くつを穿はいていないから、すぐ玄関げんかんに上あがって仕切しきりの襖ふすまを開ひらけました。私は例れいの通り机つくえの前まへに坐すわっているKを見みました。しかしお嬢おぢやうさんはもうそこにはいなかったのです。私はあたかもKの室へやから逃のがれ出るように去いるその後姿うしろすがたをちらりと認ためただけでした。私はK

にどうして早く帰ったのかと問いました。Kは心持が悪
いから休んだのだと答えました。私が自分の室には
いつてそのまま坐っていると、間もなくお嬢さんが茶
を持って来てくれました。その時お嬢さんは始めてお
帰りといつて私に挨拶あいさつをしました。私は笑いながら
さつきはなぜ逃げたんですと聞けるような捌さばけた男で
はありません。それでいて腹の中では何だかその事が
気にかかるような人間だったのです。お嬢さんはすぐ
座を立つて縁側えんがわづた伝いに向うへ行つてしまいました。し
かしKの室の前に立ち留まつて、二言三言内ふたことみことと外とで

話をしていました。それは先刻さつきの続きらしかったのですが、前を聞かない私にはまるで解りませんでした。

そのうちお嬢さんの態度がだんだん平気になって来ました。Kと私がいっしょに宅うちにいる時でも、よくKの室へやの縁側へ来て彼の名を呼びました。そうしてそこへ入って、ゆつくりしていました。無論郵便を持って来る事もあるし、洗濯物を置いてゆく事もあるので、から、そのくらいの交通は同じ宅にいる二人の関係上、当然と見なければならぬのでしようが、ぜひお嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私

には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。あの時はお嬢さんがわざわざ私の室へ来るのを回避して、Kの方ばかりへ行くように思われる事さえあつたくらいです。それならなぜKに宅を出てもらわなないのかとあなたは聞くでしょう。しかしそうすれば私がKを無理に引張ひっぱつて来た主意が立たなくなるだけです。私にはそれができないのです。

三十三

「十一月の寒い雨の降る日の事でした。私は外套を濡らして例の通り蒟蒻閻魔ごんにやくえんまを抜けて細い坂路さかみちを上あがつて宅うちへ帰りました。Kの室は空虚がらんどろでしたけれども、火鉢には継ぎたての火が暖かそうに燃えていました。私も冷たい手を早く赤い炭の上に翳かざそうと思つて、急いで自分の室の仕切りしきを開けました。すると私の火鉢には冷たい灰が白く残っているだけで、火種ひだねさえ尽きている

のです。私は急に不愉快になりました。

その時私の足音を聞いて出て来たのは、奥さんでした。奥さんは黙って室の真中に立っている私を見て、気の毒そうに外套を脱がせてくれたり、日本服を着せてくれたりしました。それから私が寒いというのを聞いて、すぐ次の間まからKの火鉢を持って来てくれました。私がKはもう帰ったのかと聞きましたら、奥さんは帰ってまた出たと答えました。その日もKは私より後おくれて帰る時間割だったのですから、私はどうした訳かと思いました。奥さんは大方用事でもできたのだらおおかた

うといつていました。

私はしばらくそこに坐すわつたまま書見しょけんをしました。宅
の中がしんと静まつて、誰だれの話し声も聞こえないうち
に、初冬はつふゆの寒さと佗わびしさとが、私の身体からだに食い込む
ような感じがしました。私はすぐ書物を伏せて立ち上
りました。私はふと賑にぎやかな所へ行きたくなくなったので
す。雨はやつと歇あがつたようですが、空はまだ冷たい鉛
のように重く見えたので、私は用心のため、蛇じゃの目め
肩かたに担かいで、砲兵工廠ほうへいこうしょうの裏手の土塀どべいについて東へ坂を
下おりました。その時分はまだ道路の改正ができない頃ころ

なので、坂の勾配こうばいが今よりもずっと急でした。道幅も狭くて、ああ真直まっすぐではなかつたのです。その上あの谷へ下りると、南が高い建物で塞ふさがつているのと、放水みずはきがよくないのとで、往来はどろどろでした。ことに細い石橋を渡やなぎらつて柳町の通りへ出る間が非道ひどかつたのです。足駄あしだでも長靴でもむやみに歩く訳にはゆきません。誰でも路みちの真中に自然と細長く泥が搔かき分けられた所を、後生大事ごしょうだいじに辿たどって行かなければならないのです。その幅は僅わずか一、二尺しゃくしかないのですから、手もなく往来に敷いてある帯の上を踏んで向うへ越すのと同じ

事です。行く人はみんな一列になつてそろそろ通り抜けます。私はこの細帯の上で、はたりとKに出合いました。足の方にばかり気を取られていた私は、彼と向き合うまで、彼の存在にまるで気が付かず^{ふさ}にいたのです。私は不意に自分の前が塞^{ふさ}がったので偶然眼を上げた時、始めてそこに立っているKを認めたのです。私はKにどこへ行つたのかと聞きました。Kはちよつとそこまでといったぎりでした。彼の答えはいつもの通りふんという調子でした。Kと私は細い帯の上で身体を替^{かわ}せました。するとKのすぐ後ろに一人の若い女が

立っているのが見えました。近眼の私には、今までそれがよく分らなかつたのですが、Kをやり越した後あとで、その女の顔を見ると、それが宅うちのお嬢さんだったので、私は少なからず驚きました。お嬢さんは心持薄赤い顔をして、私に挨拶あいさつをしました。その時分の束髪そくほつは今と違って廂ひさしが出ていないのです、そうして頭の真中まんなかに蛇へびのようにぐるぐる巻きつけてあつたものです。私はぼんやりお嬢さんの頭を見ていましたが、次の瞬間に、どつちか路みちを譲らなければならぬのだという事に気が付きました。私は思い切つてどろどろの中へ片足踏ふ

ん込みました。そうして比較的通りやすい所を空けて、お嬢さんを渡してやりました。

それから柳町の通りへ出た私はどこへ行つて好いか自分にも分らなくなりました。どこへ行つても面白くないような心持がするのです。私は飛泥の上がるのも構わずに、糠る海の中を自暴にどしどし歩きました。それから直ぐ宅へ帰つて来しました。

三十四

「私はKに向つてお嬢さんといつしよに出たのかと聞きました。Kはそうではないと答えました。真砂町まさごちちようで偶然出会つたから連れ立つて帰つて来たのだと説明しました。私はそれ以上に立ち入った質問を控えなければなりません。しかし食事の時、またお嬢さんに向つて、同じ問いを掛けたくありません。するとお嬢さんは私の嫌いな例の笑い方をするのです。そうし

てどこへ行ったか中あててみるとうまいにいうのです。
その頃ころの私はまだ癩癩かんしやくも持ちでしたから、そう不真面目ふまじめに若い女から取り扱われると腹が立ちました。ところがそこに気の付くのは、同じ食卓に着いているものうちで奥さん一人だったのです。Kはむしろ平気でした。お嬢さんの態度になると、知ってわざとやるのか、知らないで無邪気むじやきにやるのか、そのこの区別がちよつと判然はんぜんしない点がありました。若い女としてお嬢さんは思慮しよに富んだ方ほうでしたけれども、その若い女に共通な私の嫌いなところも、あると思えば思えなくもなかつ

たのです。そうしてその嫌いなところは、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬しつとに帰きしていいものか、または私に対するお嬢さんの技巧と見倣みなしてしかるべきものか、ちよつと分別に迷いました。私は今でも決してその時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたびたび繰り返した通り、愛の裏面りめんにこの感情の働きを明らかに意識していたのですから。しかも傍はたのものから見ると、ほとんど取るに足りない瑣事さじに、この感情がきつと首を持ち上げたがるのでしたから。これは余事よじ

ですが、こういう嫉妬しつとは愛の半面じゃないでしょうか。私は結婚してから、この感情がだんだん薄らいで行くのを自覚しました。その代り愛情の方も決して元のよ
うに猛烈ではないのです。

私はそれまで躊躇ちゅうちよしていた自分の心を、一思ひとおもいに相手の胸へ擲たき付けようかと考え出しました。私の相手
というのはお嬢さんではありません、奥さんの事です。奥さんにお嬢さんを呉くれろと明白な談判を開こうかと考えたのです。しかしそう決心しながら、一日一日と私は断行の日を延ばして行つたのです。そういうと私

はいかにも優柔ゆうじゆうな男のように見えます、また見えても構いませんが、実際私の進みかねたのは、意志の力に不足があつたためではありません。Kの来ないうちは、他の手ひとに乗るのが厭いやだという我慢が私を抑おさえ付けて、一歩も動けないようにしていました。Kの来た後のちは、もしかするとお嬢さんがKの方に意があるのではなからうかという疑念が絶えず私を制するようになったのです。はたしてお嬢さんが私よりもKに心を傾けているならば、この恋は口へいい出す価値のないものと私は決心していたのです。恥かを搔かかせられるのが辛つらいな

どというのとは少し訳が違います。こつちでいくら
思つても、向うが内心ほか他の人に愛の眼まなこを注そそいでいるな
らば、私はそんな女といつしよになるのは厭なのです。
世の中では否いや応おうなしに自分の好いた女を嫁よめに貰もらつて嬉うれ
しがっている人もありますが、それは私たちよりよつ
ぽど世間ずれのした男か、さもなければ愛の心理がよ
く呑のみ込めない鈍物どんぶつのする事と、当時の私は考えてい
たのです。一度貰つてしまえばどうか落ち付く
ものだぐらいの哲理では、承知する事ができないくら
い私は熱していました。つまり私は極めて高尚な愛の

理論家だったのです。同時にもつとも迂遠うえんな愛の実際家だったのです。

肝心かんじんのお嬢さんに、直接この私というものを打ち明ける機会も、長くいつしよにいるうちには時々出て来たのですが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣として、そういう事は許されていないのだという自覚が、その頃の私には強くありました。しかし決してそればかりが私を束縛したとはいえませぬ。日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねきがねなく自分の思った通りを遠慮せず口にするだけの勇気

に乏しいものと私は見込んでいたのです。

三十五

「こんな訳で私わたくしはどちらの方面わたくしへ向つても進む事ができずに立ち竦すくんでいました。身体からだの悪い時に午睡ひるねなどをすると、眼まなこだけ覚さめて周囲まわりのものが判然はつきり見えるのに、どうしても手足てあしの動かうごかせない場合ばいがありました。私は時ときとしてああいう苦しみくるしみを人知れず感かんじたのです。

その内年うちねんが暮くれて春はるになりました。ある日奥おくさんがKカに歌留多かるたをやるから誰だれか友達ともだちを連れて来こないかと

いった事があります。するとKはすぐ友達なぞは一人もないと答えたので、奥さんは驚いてしまいました。なるほどKに友達というほどの友達は一人もなかったのです。往来で会った時挨拶あいさつをするくらいのもものは多少ありましたが、それらだつて決して歌留多かるたなどを取る柄がらではなかったのです。奥さんはそれじゃ私の知つたものでも呼んで来たらどうかといひ直しましたが、私も生憎あいにくそんな陽気な遊びをする心持になれないので、好いい加減な生返事なまへんじをしたなり、打ちやつておきました。ところが晩になつてKと私はとうとうお嬢さんに引つ

張り出されてしまいました。客も誰も来ないのに、
うちうち

内々の小人数こにんずだけで取ろうという歌留多ですからすこ

ぶる静かなものでした。その上こういう遊技をやり付

けないKは、まるでふところ懐手ふところをしている人と同様でした。

私はKに一体百人一首ひやくにんいつしゆの歌を知っているのかと尋ね

ました。Kはよく知らないと答えました。私の言葉を

聞いたお嬢さんは、大方おおかたKを軽蔑けいべつするとしても取つたの

でしょう。それから眼に立つようにKの加勢をし出し

ました。しまいには二人がほとんど組になつて私に当

るといふ有様になつて来ました。私は相手次第では

喧嘩けんかを始めたかも知れなかつたのです。幸いにKの態度は少しも最初と変わりませんでした。彼のどこにも得意らしい様子を認めなかつた私は、無事にその場を切り上げる事ができました。

それから二、三日経たつた後の事のちでしたらう、奥さんとお嬢さんは朝から市ヶ谷にいる親類の所へ行くといつて宅うちを出ました。Kも私もまだ学校の始まらない頃ころでしたから、留守居同様あとに残っていました。私は書物を読むのも散歩に出るのも厭いやだったので、ただ漠然と火鉢の縁ふちに肱ひじを載せて凝じつと顎あごを支えたなり考え

ていました。隣となりの室へやにいるKも一向音いっこうを立てませんでした。双方ともいるのだかいないのだか分らないくらい静かでした。もつともこういう事は、二人の間柄として別に珍しくも何ともなかったのですから、私は別段それを気にも留めませんでした。

十時頃みあわになつて、Kは不意に仕切りの襖ふすまを開けて私と顔を見合みあわせました。彼は敷居の上に立つたまま、私に何を考えていると聞きました。私はもとより何も考えていなかったので、もし考えていたとすれば、いつもの通りお嬢さんが問題だったかも知れません。そ

のお嬢さんには無論奥さんも食つ付いていますが、近頃ではK自身が切り離すべからざる人のように、私の頭の中をぐるぐる回めぐつて、この問題を複雑めづにしているのです。Kと顔を見合せた私は、今まで臆おぼろげ気に彼を一種の邪魔ものの如く意識していながら、明らかにそうと答える訳にいかなかったのです。私は依然として彼の顔を見て黙っていました。するとKの方からつかつかと私の座敷へ入つて来て、私のあたっている火鉢の前に坐すわりました。私はすぐ両りょうひじ腕を火鉢の縁から取り除のけて、心持それをKの方へ押しやるようにしました。

Kはいつもに似合わない話を始めました。奥さんとお嬢さんは市ヶ谷のどこへ行つたのだらうというのです。私は大方おほ叔母さんの所だらうと答えました。Kはその叔母さんは何だとまた聞きます。私はやはり軍人の細君さいくんだと教えてやりました。すると女の年始は大抵十五日過すぎだのに、なぜそんなに早く出掛けたのだらうと質問するのです。私はなぜだか知らないと挨拶するより外ほかに仕方がありませんでした。

三十六

「Kはなかなか奥さんとお嬢さんの話を已めませんでした。しまいには私も答えられないような立ち入った事まで聞くのです。私は面倒よりも不思議の感に打たれました。以前私の方から二人を問題にして話しかけた時の彼を思い出すと、私はどうしても彼の調子の變つているところに気が付かずにはいられないのです。私はとうとうなぜ今日に限ってそんな事ばかりいうの

かと彼に尋ねました。その時彼は突然黙りました。しかし私は彼の結んだ口元の肉が顫えるように動いているのを注視しました。彼は元来無口な男でした。平生から何かいおうとすると、いう前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠こもっていたのでしよう。一旦声いったんが口を破つて出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちよつと眺ながめた時、私はまた何か出て来

るなとすぐ疳付かんづいたのですが、それがはたして何なんの準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまうたのです。

その時の私は恐ろしさの塊かたまりといいましうか、または苦しきの塊りといいましうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固

くなつたのです。呼吸をする弾力性さえ失われたくらいに堅くなつたのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策つたと思いましたが。先を越されたなと思いました。

しかしその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋の下から出る気味のわるい汗が襯衣に滲み透るのを凝と我慢して動かずにいきました。Kはその間いつもの通り重い口を切つては、ぽつりぽつりと自分の心

を打ち明けてゆきます。私は苦しくつて堪りませんでした。おそらくその苦しきは、大きな広告のように、私の顔の上に判然はつきとした字で貼り付けられてあつたらうと私は思うのです。いくらKでもそこに気の付かないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかつたのでしよう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫いていました。重くて鈍のろい代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分

どうしようどうしようという念に絶えず搔き乱されて
いましたから、細かい点になるとほとんど耳へ入らな
いと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子
だけは強く胸に響きました。そのために私は前いった
苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じず
ようになったのです。つまり相手は自分より強いのだ
という恐怖の念が萌し始めたのです。

Kの話が一通り済んだ時、私は何ともいう事ができ
ませんでした。こつちも彼の前に同じ意味の自白をし
たものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策

だろうか、私はそんな利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事もいえなかつたのです。またいう気にもならなかつたのです。

ひるめし

午食の時、Kと私は向い合せに席を占めました。

げじよ下女に給仕をしてもらつて、私はいつにない不味まい飯めしを済ませました。二人は食事中もほとんど口を利ききませんでした。奥さんとお嬢さんはいつ帰るのだから分りませんでした。

三十七

「二人は各自めいめいの室へやに引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Kの静かな事は朝と同じでした。私も凝わたくしと考じつえ込んでいました。

私は当然自分の心をKに打ち明けるべきはずだと思
いました。しかしそれにはもう時機おくが後おくれてしまつた
という気も起りました。なぜ先刻さつきKの言葉を遮さへきって、
こつちから逆襲しなかつたのか、そこが非常な手落てぬかり

のように見えて来ました。せめてKの後にあと続いて、自分は自分の思う通りをその場で話してしまつたら、まだ好かつたろうにとも考えました。Kの自白に一段落が付いた今となつて、こつちからまた同じ事を切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかつたのです。私の頭は悔恨に揺ゆられてぐらぐらしました。

私はKが再び仕切りの襖ふすまを開あけて向うから突進してきてくれれば好いいと思ひました。私にいわせれば、先刻はまるで不意撃ふいうちに会つたも同じでした。私にはKに

応ずる準備も何もなかつたのです。私は午前に失つたものを、今度は取り戻そうという下心したしころを持っていました。それで時々眼を上げて、襖を眺めながました。しかしその襖はいつまで経たつても開あきません。そうしてKは永久に静かなのです。

その内私うちの頭は段々この静かさに搔かき乱されるようになって来ました。Kは今襖の向うで何を考えているだろうと思うと、それが気になつて堪たまらないのです。不断もこんな風ふうにお互いが仕切一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あつたのですが、私はKが静か

であればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だつたのですから、その時の私はよほど調子が狂つていたものと見なければなりません。それでいて私はこつちから進んで襖を開ける事ができなかつたのです。一旦いったんいいそびれた私は、また向うから働き掛けられる時機を待つより外ほかに仕方がなかつたのです。

しまいには私は凝じっとしておられなくなりました。無理に凝としていれば、Kの部屋へ飛び込みたくなるのです。私は仕方なしに立つて縁側へ出ました。そこから茶の間へ来て、何という目的もなく、鉄瓶てつびんの湯を湯呑ゆのみ

に注^{ついで}で一杯呑みました。それから玄関へ出ました。私はわざとKの室を回避するようにして、こんな風に自分を往来の真中に見出^{みいだ}したのです。私には無論どこへ行くとい^{あて}う的もありません。ただ凝^{じつ}としていられないだけでした。それで方角も何も構わずに、正月の町を、むやみに歩き廻^{まわ}ったのです。私の頭はいくら歩いてもKの事でい^{ぱい}っぱいになっていました。私もKを振^{ふる}い落とす気で歩き廻る訳ではなかったのです。むしろ自分から進んで彼の姿を咀^{そしやく}嚼しながらうろついていたのです。私には第一に彼が解^{かい}しがたい男のように見えませんでした。

どうしてあんな事を突然私に打ち明けたのか、またどうして打ち明けないといけないほどに、彼の恋が募^つつて来たのか、そうして平生の彼はどこに吹き飛ばされてしまったのか、すべて私には解しにくい問題でした。私は彼の強い事を知っていました。また彼の真面目^{まじめ}な事を知っていました。私はこれから私の取るべき態度を決する前に、彼について聞かなければならない多くをもっていると感じました。同時にこれからさき彼を相手にするのが変に気味が悪かったです。私は夢中に町の中を歩きながら、自分の室に凝^{じっ}と坐^{すわ}つ

ている彼の容貌ようぼうを始終眼の前に描えがき出しました。しかもいくら私が歩いても彼を動かす事は到底できないのだという声がどこかで聞こえるのです。つまり私には彼が一種の魔物のように思えたからでしょう。私は永久彼に祟たたられたのではなからうかという気さえしました。

私が疲れて宅うちへ帰った時、彼の室は依然として人ひと気のないように静かでした。

三十八

「私が家へはいると間もなく俾くるまの音が聞こえました。

今のように護謨輪ゴムわのない時分でしたから、がらがらいう厭いやな響ひびきがかなりの距離でも耳に立つのです。車はやがて門前で留まりました。

私が夕飯ゆうめしに呼び出されたのは、それから三十分ばかり経たった後あとの事でしたが、まだ奥さんとお嬢さんの晴着はれぎが脱すぎ棄すてられたまま、次の室を乱雑いろどに彩いろどっ

ました。二人は遅くなると私たちに済まないというので、飯の支度に間に合うように、急いで帰つて来たのだそうです。しかし奥さんの親切はKと私とに取つてほとんど無効も同じ事でした。私は食卓に坐りながら、言葉を惜しがる人のように、素気ない挨拶ばかりしていました。Kは私よりもなお寡言かげんでした。たまに親子連おやこづれで外出した女二人の気分が、また平生へいぜいよりは勝すぐれて晴れやかだったので、我々の態度はなおの事眼に付きます。奥さんは私にどうかしたのかと聞きました。私は少し心持が悪いと答えました。実際私は心持が悪

かつたのです。すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利ききたくないからだといいました。お嬢さんはなぜ口が利ききたくないのかと追窮ついきゆうしました。私はその時ふと重たい臉まぶたを上げてKの顔を見ました。私にはKが何と答えるだろうかという好奇心があつたのです。Kの唇は例のように少し顫ふるえていました。それが知らない人から見ると、まるで返事に迷っているとか思われなのです。お嬢さんは笑いながらまた何かむずかしい事を考えているのだらうといいました。

Kの顔は心持薄赤くなりました。

その晩私はいつもより早く床へ入りました。私が食事の時気分が悪いといったのを気にして、奥さんは十時頃蕎麦湯を持って来てくれました。しかし私の室はもう真暗でした。奥さんはおやおやと云って、仕切りの襖を細目に開けました。洋燈の光がKの机から斜めにぼんやりと私の室に差し込みました。Kはまだ起きていたものとみえます。奥さんは枕元に坐つて、大方風邪を引いたのだろうから身体を暖ためるがいいといつて、湯呑を顔の傍へ突き付けるのです。私はや

むをえず、どろどろした蕎麦湯を奥さんの見ている前で飲みました。

私は遅くなるまで暗いなかで考えていました。無論一つ問題をぐるぐる廻転かいてんさせるだけで、外ほかに何の効力もなかったのです。私は突然Kが今隣りの室で何をしているだろうと思い出しました。私は半ば無意識においてと声を掛けました。すると向うでもおいと返事をしました。Kもまだ起きていたのです。私はまだ寝ないのかと襖あいさつごしに聞きました。もう寝るといふ簡単な挨拶がありました。何をしているのだと私は重ねて問

いました。今度はKの答えがありません。その代り五、六分経つたと思う頃に、押入おしいれをがらりと開けて、床とこを延べる音が手に取るように聞こえました。私はもう何時なんじかとまた尋ねました。Kは一時二十分だと答えました。やがて洋燈ランプをふつと吹き消す音がして、家中うちじゅうが真暗なうちに、しんと静まりました。

しかし私の眼はその暗いなかでいよいよ冴さえて来るばかりです。私はまた半ば無意識な状態で、おいとKに声を掛けました。Kも以前と同じような調子で、おいと答えました。私は今朝けさ彼から聞いた事について、

もつと詳しい話をしたいが、彼の都合はどうだと、とうとうこつちから切り出しました。私は無論襖越ふすまごしにそんな談話を交換する気はなかつたのですが、Kの返答だけは即坐に得られる事と考えたのです。ところがKは先刻さつきから二度おいと呼ばれて、二度おいと答えたような素直すなおな調子で、今度は応じません。そうだなあと低い声で渋っています。私はまたはつと思わせられました。

三十九

「Kの生返事は翌日なまへんじになつても、よくじつ彼の態度によく現われていました。彼は自分から進んで例の問題に触れようとする気色けしきを決して見せませんでした。もつとも機会もなかつたのです。奥さんとお嬢さんが揃つて一日宅うちを空けでもしなければ、二人はゆつくり落ち付いて、そういう事を話し合う訳にも行かないのですから。私はそれをよく心得ていました。

心得ていながら、変にいらいらし出すのです。その結果始めは向うから来るのを待つつもりで、暗あんに用意をしていた私が、折があつたらこつちで口を切ろうと決心するようになったのです。

同時に私は黙もくつて家うちのものものの様子を観察して見ました。しかし奥さんの態度にもお嬢さんの素振そぶりにも、別に平生へいぜいと変へつた点はありませんでした。Kの自白以前と自白以後とで、彼らの挙動にこれという差違が生じないならば、彼の自白は単に私だけに限られた自白で、肝心かんじんの本人にも、またその監督者たる奥さんにも、ま

だ通じていないのは慥たしかでした。そう考えた時私は少し安心しました。それで無理に機会を拵こしらえて、わざとらしく話を持ち出すよりは、自然の与えてくれるものを取り逃さないようにする方が好かろうと思つて、例の問題にはしばらく手を着けずにそつとしておく事にしました。

こういつてしまえば大変簡単に聞こえますが、そうした心の経過には、潮しおの満干みちひと同じように、色々の高低たかびくがあつたのです。私はKの動かない様子を見て、それにさまざまの意味を付け加えました。奥さんとお

嬢さんの言語動作を観察して、二人の心がはたしてそこに現われている通りなのだろうかうたがと疑うたがつてもみました。そうして人間の胸の中に装置された複雑な器械が、時計の針のように、明瞭めいりょうに偽りなく、盤上ばんじょうの数字を指し得るうものだろうかと考えました。要するに私は同じ事をこうも取り、ああも取りした揚句あげく、漸くようやここに落ち付いたものと思つて下さい。更にむずかしくいえば、落ち付くなどという言葉は、この際決して使われた義理でなかつたのかも知れませぬ。

その内うち学校がまた始まりました。私たちは時間の同

じ日には連れ立って宅うちを出ます。都合がよければ帰る時にもやはりいつしよに帰りました。外部から見たKと私は、何にも前と違つたところがないように親しくなつたのです。けれども腹の中では、各自てんでんに各自てんでんの事を勝手に考えていたに違いありません。ある日私は突然往来でKに肉薄しました。私が第一に聞いたのは、この間の自白が私だけに限られているか、または奥さんやお嬢さんにも通じているかの点にあつたのです。私のこれから取るべき態度は、この問いに対する彼の答え次第で極きめなければならぬと、私は思つたので

す。すると彼は外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言しました。私は事情が自分の推察通りだったので、内心嬉しがりました。私はKの私より横着なのをよく知っていました。彼の度胸にも敵わないという自覚があつたのです。けれども一方ではまた妙に彼を信じていました。学資の事で養家を三年も欺いていた彼ですけれども、彼の信用は私に対して少しも損われていなかつたのです。私はそれがためにかえつて彼を信じ出したくらいです。だからいくら疑い深い私でも、明白な彼の答えを腹の中で否定する気は起りようがな

かつたのです。

私はまた彼に向つて、彼の恋をどう取り扱うつもりかと尋ねました。それが単なる自白に過ぎないのか、またはその自白について、實際的の効果をも収める気なのかと問うたのです。しかるに彼はそこになると、何にも答えません。黙つて下を向いて歩き出します。

私は彼に隠し立てをしてくれるな、すべて思った通りを話してくれと頼みました。彼は何も私に隠す必要はないと判然断言しました。はっきりしかし私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです。いちごん私も往来だから

わざわざ立ち留まつて底^{そこ}まで突き留める訳にいきませ
ん。ついそれなりにしてしまいました。

四十

「ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓から射す光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらと引ひつ繰くり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べて来いと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見付からないので、私は二度も三度も雑誌を借り替えなければな

りませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向う側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。私はふと眼を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近付けました。ご承知の通り図書館では他の人ほかの邪魔になるような大きな声で話をする訳にゆかないのですから、Kのこの所作しよさは誰でもやる普通の事なのですが、私はその時に限って、一種変な心持がしました。

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちよつと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいつしよに散歩をしないかというのです。私は少し待っていていれればしてもいいと答えました。彼は待っているといったまま、すぐ私の前の空席に腰をおろしました。すると私は気が散つて急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物いちもつがあつて、談判でもしに來られたように思われて仕方がないのです。私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち

付き払つてもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すと共に、Kと図書館を出しました。

二人は別に行く所もなかつたので、竜岡町から池の端へ出て、上野の公園の中へ入りました。その時彼は例の事件について、突然向うから口を切りました。前後の様子を綜合して考えると、Kはそのため私をわざわざ散歩に引つ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ實際的の方面へ向つてちつとも進んでいませんでした。彼は私に向つて、ただ漠然と、どう

思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛の淵ふちに陥おちいった彼を、どんな眼で私が眺ながめるかという質問なのです。一言いちごんでいうと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生へいぜいと異なる点を確かに認める事ができたと思いました。たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他ひとの思わくを憚はばかるほど弱くでき上つてはいなかったのです。こうと信じたら一人でどんどん進んで行くだけの度胸もあり勇氣もある男なのです。養家ようか事件でその特色を強く胸の裏うちに彫ほり付けられた私が、これは様子が

違うと明らかに意識したのは当然の結果なのです。

私がKに向つて、この際何^なんで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然^{しやうぜん}とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいといいました。そうして迷っているから自分で自分が分らなくなつてしまつたので、私に公平な批評を求めるより外^{ほか}に仕方がないといいました。私は隙^すかさず迷うという意味を聞き糺^{ただ}しました。彼は進んでいいか退^{しりぞ}いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと

彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰りました。彼はただ苦しいといっただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いでやったか分りません。私はそのくらいの美しい同情をもつて生れて来た人間と自分ながら信じています。しかしその時の私は違っていました。

四十一

「私はちようど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の眼、私の心、私の身体からだ、すべて私という名の付くものを五分ぶの隙間すきまもなないように用意して、Kに向ったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心ようさいでした。私は彼自身の手から、彼の保管ほくわんしている要塞ようさいの地図を受け取って、彼の眼の前で

ゆつくりそれを眺める事ができたも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨ほうこうしてふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ひとつうちで彼を倒す事ができるだろうという点にばかり眼を着けました。そうしてすぐ彼の虚きよに付け込んだのです。私は彼に向つて急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分もあつたのですから、自分に滑稽こっけいだの羞恥しゆううちだのを感じずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のないものは馬鹿ばかだ」といい放ちました。これは二人で房州ぼうしゅうを

旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐ふくしゅうではありません。私は復讐以上に残酷な意味をもっていたという事を自白します。私はその一言いちごんでKの前に横たわる恋の行手ゆくてを塞ふさごうとしたのです。

Kは真宗寺しんしゅうでらに生れた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨しゅうしに近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏しいのは承知していますが、私はただ

男女なんによに関係した点についてのみ、そう認めていたので
す。Kは昔から精進しょうじんという言葉が好きでした。私はそ
の言葉の中に、禁欲きんよくという言葉も籠こもっているのだらう
と解釈していました。しかし後で實際を聞いて見ると、
それよりもまだ嚴重な意味が含まれているので、私は
驚きました。道のためにはすべてを犠牲にすべきもの
だというのが彼の第一信条なのですから、摂欲せつよくや禁欲きんよく
は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨害さまたげに
なるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよ
く彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃ころから

お嬢さんを思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑ぶべつの方が余計に現われていました。

こういう過去を二人の間に通り返けて来ているのですから、精神的に向上心のないものは馬鹿だという言葉は、Kに取って痛いに違いなかつたのです。しかし前にもいった通り、私はこの一言で、彼が折角せっかく積み上げた過去を蹴散けちらしたつもりではありません。かえつてそれを今まで通り積み重ねて行かせようとしたので

す。それが道に達しようが、天に届こうが、私は構いません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見詰めています。「馬鹿だ」とやがてKが答えました。「僕は馬鹿だ」

Kはびたりとそこへ立ち留どまったまま動きません。

彼は地面の上を見詰めています。私は思わずぎよつと

しました。私にはKがその刹那せつなに居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしても彼の声がいかに力に乏しいという事に気が付きました。私は彼の眼遣めづかいを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないので、徐々そろそろとまた歩き出しました。

四十二

「私はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗あんに待ち受けました。あるいは待ち伏せといった方がまだ適当かも知れません。その時の私はたといKを騙だまし打ちにしても構わないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍そばへ来て、お前は卑怯ひきようだと一言私語ひことばいてくれるものがあつたなら、私はその瞬間

に、はつと我に立ち帰ったかも知れません。もしKがその人であつたなら、私はおそらく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるには余りに正直でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だつたのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払う事を忘れて、かえつてそこに付け込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私の方を見ました。今度は私の方で自然と足を留めました。するとKも留まりました。私はその時やつとKの眼を真向まむきに見

る事ができたのです。Kは私より背せいの高い男でしたから、私は勢い彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼おおかみのごとき心を罪のないう羊に向けたのです。

「もうその話は止めよう」と彼がいました。彼の眼にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちよつと挨拶あいさつができなかつたのです。するとKは、「止めてくれ」と今度は頼むようにいい直しました。

私はその時彼に向つて残酷な答を与えたのです。狼おおかみが隙すきを見て羊の咽喉のどぶえ笛くらへ食い付くように。

「止めてくれって、僕がいい出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。しかし君が止めたければ、止めてもいいが、ただ口の先で止めたつて仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

私がこういった時、背の高い彼は自然と私の前に萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話す通り頗る強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひど

く非難される場合には、決して平気でいられない質たちだつたのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は卒然そつぜん「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならぬ事もない」と付け加えました。彼の調子は独言ひとりごとのようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、小石川こいしかわの宿の方に足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、何しろ冬の事ですから、公園のなかは淋さびしいものでした。ことに霜に打たれて蒼味あおみを失つた杉の木立こだち

の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べて聳えている
ちやかっしよく こすえ
 のを振り返って見た時は、寒さが背中へ嚙り付いたよ
かじ
 うな心持がしました。我々は夕暮の本郷台を急ぎ足で
ほんごうだい
 どしどし通り抜けて、また向うの岡へ上るべく小石川
おか のほ
 の谷へ下りたのです。私はその頃になつて、ようやく
ころろ
 外套の下に体の温味を感じ出したぐらいです。
がいとろ たい あたたかみ
 急いだためでもありませんでしたが、我々は帰り路には
みち
 ほとんど口を聞きませんでした。宅へ帰つて食卓に
うち
 向つた時、奥さんはどうして遅くなつたのかと尋ねま
 した。私はKに誘われて上野へ行つたと答えました。
うえの

奥さんはこの寒いのにといつて驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があつたのかと聞きたがりません。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生へいせいから無口なKは、いつもよりなお黙つていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑つても、碌ろくな挨拶あいさつはしませんでした。それから飯めしを呑のみ込むように掻かき込んで、私がまだ席へやを立たないうちに、自分の室へやへ引き取りました。

四十三

「その頃はころは覚醒かくせいとか新しい生活とかいう文字もんじのまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意いちいに新しい方角へ走り出さなかつたのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出す事のできないほど尊たつとい過去があつたからです。彼はそのためこんにちに今日まで生きて来たといつてもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物

に向つて猛進しないといつて、決してその愛の生温いなまぬる事を証拠立てる訳にはゆきません。いくら熾烈しれつな感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏み留とどまつて自分の過去を振り返らなければならなかつたのです。そうすると過去が指し示す路みちを今まで通り歩かなければならなくなるのです。その上彼には現代人のもたない強情かうじょうと我慢があります。私はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野うえのから帰った晩は、私に取って比較的安静な夜よでした。私はKが室へやへ引き上げたあとを追ひ懸けて、彼の机そばの傍すわに坐り込みました。そうして取り留めもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の眼には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声にはたしかに得意の響きがあつたのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手を翳かざした後あと、自分の室に帰りました。外ほかの事にかけては何をしても彼に及ばなかつた私も、その時だけは恐るるに足りないという自覚を彼に対してもつていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で眼を覚めました。見ると、間の襖ふすまが二尺しゃくばかり開あいて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の室には宵よいの通りまだ燈火あかりが点ついているのです。急に世界の変った私は、少しの間あいだ口を利きく事もできずに、ぼうつとして、その光景を眺ながめていました。

その時Kはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師かげぼうしのようなKに向って、何か用かと聞き返しました。Kは大

した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行つたついでに聞いてみただけだと答えました。Kは洋燈ランプの灯ひを背中に受けているので、彼の顔色や眼つきは、全く私には分りませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえつて落ち付いていたくらいでした。

Kはやがて開けた襖をびたりと立て切りました。私の室はすぐ元の暗闇くらやみに帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた眼を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝よくあさになつて、昨夕ゆうべの事を

考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思いました。それで飯を食う時、Kに聞きました。Kはたしかに襖を開けて私の名を呼んだといっています。なぜそんな事をしたのかと尋ねると、別に判然はつきりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向うから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日ちようど同じ時間に講義の始まる時間割になつていたので、二人はやがていつしよに宅うちを出ました。今朝けさから昨夕の事が気に掛かつている私は、途中で

またKを追窮ついききゆうしました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子でいい切りました。昨日上野で「その話はもう止めやよう」といったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点に掛けて鋭い自尊心をもった男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかつたその二字が妙な力で私の頭を抑おさえ始めたので

四十四

「Kの果断に富んだ性格は私わたくしによく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔ゆうじゆうな訳も私にはちやんと呑み込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫つかまえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭のなかで何遍なんべんも咀嚼そしやくしているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら揺うごき始めるようになりま

した。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかも知れないと思ひ出したのです。すべての疑惑、
煩悶はんもん、懊惱おうのう、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸
のなかに畳たたみ込んでいるのではなからうかと疑うたぐり始め
たのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺ながめ返し
てみた私は、はっと驚きました。その時の私がもしこ
の驚きをもつて、もう一返いっぺん彼の口にした覚悟の内容を
公平に見廻みまわしたらば、まだよかつたかも知れませぬ。
悲しい事に私は片眼めっかちでした。私はただKがお嬢さんに
対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しまし

た。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうと一図いちずに思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起しました。私はKより先に、しかもKの知らない間まに、事を運ばなくてはならないと覚悟を極きめました。私は黙もくって機会を覘ねらっていました。しかし二日経たつても三日経たつても、私はそれを捕つかまえる事ができません。私はKのいない時、またお嬢さんの留守な折を待って、

奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといった風の日はかり続いて、どうしても「今だ」と思う好都合が出て来てくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後のち私はとうとう堪え切れなくなつて仮病けびょうを遣つかいました。奥さんからもお嬢さんからも、K自身なまへんじからも、起きろという催促を受けた私は、生返事なまへんじをしただけで、十時頃ごろまで蒲団ふとんを被かぶつて寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなつて、家の内なかがひっそり静まつた頃を見計みはからつて寢床を出しました。私の顔を見た

奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食物はたべもの
まくらもと

枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよかろうと

忠告してもくれました。身体からだに異状のない私は、とて

も寝る気にはなれません。顔を洗っていつもの通り茶

の間で飯めしを食いました。その時奥さんは長火鉢ながひばちの向側むこうがわ

から給仕をしてくれたのです。私は朝飯あさめしとも午飯ひるめしとも

片付かない茶碗ちやわんを手を持ったまま、どんな風に問題を

切り出したものだろうか、そればかりに屈托くつたくしてい

たから、外観からは実際気分の好よくない病人らしく見

えただらうと思います。

私は飯を終つて烟草を吹かし出しました。私が立たないで奥さんも火鉢の傍を離れる訳にゆきません。下女を呼んで膳を下げさせた上、鉄瓶に水を注したり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向うでなぜですと聞き返して来ました。私は実は少し話したい事があるのだといいました。奥さんは何ですかといつて、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分にはいり込めないような軽いものでしたから、私は次に

出すべき文句も少し渋りました。

私は仕方なしに言葉の上で、好い加減にうろつき廻まわった末、Kが近頃何かいいはしなかつたかと奥さんちかごろに聞いてみました。奥さんは思いも寄らないという風をして、「何を？」とまた反問して来ました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおつしやつたんですか」とかえつて向うで聞くのです。

四十五

「Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかつた私は、「いいえ」といつてしまった後で、すぐ自分の嘘うそを快こころよからず感じました。仕方がないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだといい直しました。奥さんは「そうですか」といつて、後あとを待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥

さん、お嬢さんを私に下さい」といいました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでしたが、それでも少時返事ができなかつたものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度いい出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしていられません。「下さい、ぜひ下さい」といいました。

「私の妻としてぜひ下さい」といいました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち付いていました。「上げてもいいが、あんまり急じゃありませんか」と聞くのです。私が「急に貰いたいのだ」とすぐ答

えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか」と念を押すのです。私はいい出したのは突然でも、考えたのは突然でないという訳を強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありました。私はそれを忘れてしまいました。男のように判然はきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合には大変心持よく話のできる人でした。「宜よござんす、差し上げましょう」といいました。「差し上げるなんて威張いばった口の利きける境遇ではありません。どうぞ貰もらっ

て下さい。ご存じの通り父親のない憐れな子です」と
 後では向うから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片付いてしまいました。最初
 からしまいまでにおそらく十五分とは掛らなかつたで
 しょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかつたのです。
 親類に相談する必要もない、後から断ればそれで沢山
 だといいました。本人の意嚮さえたしかめるに及ばな
 いと明言しました。そんな点になると、学問をした私
 の方が、かえって形式に拘泥するくらいに思われたの
 です。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承

諾を得るのが順序らしいと私が注意した時、奥さんは「大丈夫です。本人が不承知の所へ、私があの子をやるはずがありませんから」といいました。

自分の室へ帰った私は、事のあまりに訳もなく進化したのを考えて、かえって変な気持になりました。はたして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底に這い込んで来たくらいです。けれども大体の上において、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私のすべてを新たにしました。

私は午頃ひるごろまた茶の間へ出掛けて行って、奥さんに、

今朝けさの話をお嬢さんに何時いつ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話しても構わなからうというような事をいいます。こうなると何だか私よりも相手の方が男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き留めて、もし早い方が希望ならば、今日でもいい、稽古けいこから帰つて来たら、すぐ話そうというのです。私はそうしてもらう方が都合が好いいと答えてまた自分の室に帰りました。しかし黙つて自分の机の前に坐すわつて、二人のこそこそ話を遠くから聞いている

私を想像してみると、何だか落ち付いていられないよ
うな気もするのです。私はとうとう帽子を被かぶつて表へ
出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合
いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたら
しかつたのです。私が帽子を脱とつて「今お帰り」と尋
ねると、向うではもう病気は癒なおつたのかと不思議そう
に聞くのです。私は「ええ癒なおりました、癒なおりました」と
答えて、ずんずん水道橋すいどうぼしの方へ曲まつてしまいました。

四十六

「私は猿楽町さるがくちようから神保町の通りへ出て、小川町おがわまちの方へ曲りました。私がこの界限かいわいを歩くのは、いつも古本屋をひやかすのが目的でしたが、その日は手摺てずれのした書物などを眺ながめる気が、どうしても起らないのです。私は歩きながら絶えず宅うちの事を考えていました。私には先刻さつきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんが宅へ帰ってからの想像がありました。私はつまり

この二つのもので歩かせられていたようなものです。その上私は時々往来の真中で我知らずふと立ち留まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしていゝ時分だろうなどと考えました。また或る時は、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋を渡つて、明神の坂を上がつて、本郷台へ来て、それからまた菊坂を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区に跨がつて、いびつな円を描いたともいわれるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKの事を考

えなかつたのです。今その時の私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみても一向分りませぬ。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れ得るくらい、一方に緊張していたとみればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかつたのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私が宅の格子を開けて、玄関から坐敷へ通る時、すなわち例のごとく彼の室を抜けようとした瞬間でした。彼はいつもの通り机に向つて書見をしていました。彼はいつもの通り書物から眼を放して、私を見ました。しかし彼は

つもの通り今帰ったのかとはいいませんでした。彼は「病気はもう癒いいのか、医者へでも行ったのか」と聞きました。私はその刹那せつなに、彼の前に手を突いて、詫あやまりたくなつたのです。しかも私の受けたその時の衝動は決して弱いものではなかつたのです。もしKと私がつた二人曠野こうやの真中にでも立っていたならば、私はきつと良心の命令に従つて、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い留められてしまつたのです。そうして悲しい事に永久に復活しなかつたのです。

夕飯の時Kと私はまた顔を合せました。何にも知ら

ないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い眼を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもより嬉し^{うれ}そうでした。私だけがすべてを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。その時お嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の室で只今^{ただいま}と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんは^{おおかたさま}大方極りが悪いのだらうといつて、ちよつと私の顔を

見ました。Kはなお不思議そうに、なんで極りが悪いのかと追窮ついきゆうしに掛かかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔付かおつきで、事の成行なりゆきをほぼ推察していました。しかしKに説明を与へるために、私のいる前で、それを悉ことごとく話されては堪たまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいの事を平気でする女なのですから、私はひやひやしたのです。幸いにKはまた元の沈黙に帰りました。平生へいぜいより多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いだいて

いる点までは話を進めずにしまいました。私はほつと
一息ひといきして室へ帰りました。しかし私がこれから先Kに
対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私は
それを考えずにはいられませんでした。私は色々の弁
護を自分の胸で拵こしらえてみました。けれどもどの弁護も
Kに対して面と向うには足りませんでした、卑怯ひきような私
はついに自分で自分をKに説明するのが厭いやになったの
です。

四十七

「私はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのはいうまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼に済まないと思つたのです。その上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ツつくように刺戟しげきするのですから、私はなお辛つらかったです。どこか男らしい気性を具そなえた奥さんは、いつ私の事を食

卓でKに素^すぱ抜かないとも限りません。それ以来ことに目立つように思えた私に対するお嬢さんの拳^{きょ}止^し動作^{どうさ}も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならぬ位置に立ちました。しかし倫理的に弱点をもっていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難の事のように感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてそういつてもらおうかと考えました。無論私のいない時

にです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目めんぼくのないのに変りはありません。と行って、拵こしらえ事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問きつもんされるに極きまっています。もし奥さんにすべての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前に曝さらけ出さなければなりません。真面目まじめな私には、それが私の未来の信用に関すると思われなかつたのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分ぶ一厘りんでも、私には堪え切れない不幸のように見えま

した。

要するに私は正直な路みちを歩くつもりで、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾こうかつな男でした。そうしてそこに気のついていゝものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直つて、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑つた事をぜひとも周囲の人に知られなければならぬ窮境きゆうきように陥つたのです。私はあくまで滑つた事を隠したがりませんでした。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかつたのです。私はこの間に挟はさまつてまた立ち竦すくみました。

五、六日経つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私を詰るなじのです。私はこの問いの前に固くなりました。その時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で妾わたしが話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか。平生へいぜいあんなに親しくしている間柄なのに、黙って知らん顔をしているのは」

私はKがその時何かいいはしなかつたかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にもいわないと答えました。しかし私は進んでもつと細こまかい事を尋ねずにはいられませんでした。奥さんは固もとより何も隠す訳がありません。大した話もないがといいながら、一々Kの様子を語って聞かせてくれました。

奥さんのいうところを綜合そうごうして考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち付いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口ひとくち

いったただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、「おめでとうございませす」といったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子しょうじを開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか」と聞いたそうです。それから「何かお祝いを上げたいが、私は金がないから上げる事ができません」といったそうです。奥さんの前に坐すわっていた私は、その話を聞いて胸が塞ふさがるような苦しさを覚えしました。

四十八

「勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日
余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と
異なつた様子を見せなかつたので、私は全くそれに気
が付かずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい
外観だけにもせよ、敬服に値すあたべきだと私は考えまし
た。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙はるかに
立派に見えました。「おれは策略で勝つても人間とし

ては負けたのだ」という感じが私の胸に渦巻いて起りました。私はその時さぞKが軽蔑けいべつしている事だろうと思つて、一人で顔を赧あからめました。しかし今更Kの前に出で、恥を搔かかせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進もうか止よそうかと考えて、ともかくも翌日あくるひまで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまつたのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然ぞっとします。いつも東枕ひがしまくらで寝る私が、その晩に限つて、偶然西枕とこに床を敷いた

のも、何かの因縁いんねんかも知れません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと眼を覚ましたのです。見ると、いつも立て切つてあるKと私の室へやとの仕切しきりの襖ふすまが、この間の晩と同じくらい開あいています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肱ひじを突いて起き上がりながら、屹きつとKの室を覗のぞきました。洋燈ランプが暗く点ともつているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛蒲団かけぶとんは跳返はねかえされたように裾すその方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突つッ伏ぶしている

私はおいといて声を掛けました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの身体は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際まで行きました。そこから彼の室の様子を、暗い洋燈ランプの光で見廻してみました。

その時私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を聞かされた時のそれとほぼ同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、あたかも硝子ガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちぼうだちに

立ち竦すくみました。それが疾風しつぷうのごとく私を通過したあとで、私はまたああ失策しまつたと思ひました。もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯を物凄ものすごく照らししました。そうして私はがたがた顫ふるえ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事ができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは予期通り私の名宛なあてになつていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したような事は何にも書いてありませんでした。私は私に

取つてどんなに辛い文句がその中に書き列ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの眼に触れたら、どんなに軽蔑されるかも知れないという恐怖があつたのです。私はちよつと眼を通しただけで、まず助かつたと思ひました。(固より世間体の上だけで助かつたのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、

自殺するといふだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあつさりとした文句でその後あとに付け加えてありました。世話ついでに死後の片付方かたづけかたも頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑を掛けて済まんから宜よろしく詫わびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要な事はみんなひとくち一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだという事に気が付きました。しかし私のもつとも痛切に感

じたのは、最後に墨すみの余りで書き添すえたらしく見える、もつと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

私は顫ふるえる手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれを皆みんなの眼に着くように、元の通り机の上に置きました。そうして振り返って、襖ふすまに迸ほとばしっている血潮を始めて見たのです。

四十九

「私は突然Kの頭を抱かかえるように両手で少し持ち上げました。私はKの死顔しにがおが一目見ひとめたかったのです。しかし俯伏うつぶしになつてゐる彼の顔を、こうして下から覗のぞき込んだ時、私はすぐその手を放してしまいました。慄ぞつとしたばかりではないのです。彼の頭が非常に重たく感ぜられたのです。私は上から今触さわつた冷たい耳と、平生へいぜいに変わらない五分刈ごぶがりの濃い髪の毛を少時眺しばらくながめていま

した。私は少しも泣く気にはなれませんでした。私はただ恐ろしかったのです。そうしてその恐ろしさは、眼の前の光景が官能を刺激しげきして起る単調な恐ろしさばかりではありません。私は忽然こうぜんと冷たくなつたこの友達によつて暗示された運命の恐ろしさを深く感じたのです。

私は何の分別ぶんべつもなくまた私の室へやに帰りました。そうして八畳の中をぐるぐる廻まわり始めました。私の頭は無意味でも当分そうして動いていると私に命令するので。私はどうかしなければならぬと思ひました。同

時にもうどうする事もできないのだと思いました。座敷の中をぐるぐる廻らなければいられなくなつたのです。檻おりの中へ入れられた熊くまのような態度で。

私は時々奥へ行つて奥さんを起そうという気になります。けれども女にこの恐ろしい有様を見せては悪いという心持がすぐ私を遮かざります。奥さんはとにかく、お嬢さんを驚かす事は、とてもできないという強い意志が私を抑おさえつけます。私はまたぐるぐる廻り始めるのです。

私はその間に自分の室の洋燈ランプを点つけました。それか

ら時計を折々見ました。その時の時計ほど埒らちの明あかない遅いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明よあけに間まもなかつた事だけは明らかです。ぐるぐる廻まわりながら、その夜明を待ち焦こがれた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。学校は八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合わないのです。下女げじよはその関係で六時頃に起きる訳になっていました。しかしその日私が下女を起しに行ったのは

まだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だといつて注意してくれました。奥さんは私の足音で眼を覚ましたのです。私は奥さんに眼が覚めているなら、ちよつと私の室^{へや}まで来てくれと頼みました。奥さんは寝巻の上へ不断着^{ふだんぎ}の羽織を引^ひつ掛^かけて、私の後^{あと}に跟^ついて来ました。私は室^{へや}へはいるや否^{いな}や、今まで開^あいていた仕切りの襖^{ふすま}をすぐ立て切りました。そうして奥さんに飛んだ事ができたと小声で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顚^{あご}で隣の室を指すようにして、「驚いちゃいけません」といいました。奥さんは蒼^{あお}い

顔をしました。「奥さん、Kは自殺しました」と私がまたいいました。奥さんはそこに居竦いすくまったように、私の顔を見て黙っていました。その時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。「済みません。私が悪かったのです。あなたにもお嬢さんにも済まない事になりました」と詫あやまりました。私は奥さんと向い合うまで、そんな言葉を口にする気はまるでなかったのです。しかし奥さんの顔を見た時不意に我とも知らずそういつてしまったのです。Kに詫まる事のできない私は、こうして奥さんとお嬢さんに詫わびなければい

れなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が
平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔ざんげの口を開かした
のです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釈
しなかつたのは私にとって幸いでした。蒼い顔をしな
がら、「不慮の出来事なら仕方がないじゃありません
か」と慰めるようにいつてくれました。しかしその顔
には驚きと怖れおそとが、彫り付けられたように、硬く筋
肉を攪つかんでいました。

五十

「私は奥さんに気の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙からかみを開けました。その時Kの洋燈ランプに油が尽きたと見えて、室へやの中はほとんど真暗まっくらでした。

私は引き返して自分の洋燈を手につまま、入口に立つて奥さんを顧みしました。奥さんは私の後ろから隠れるようにして、四畳の中を覗のぞき込みました。しかしはいろいろとはしません。そこはそのままにしておいて、

雨戸を開けてくれと私にいいました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得ていました。私は医者所へも行ききました。また警察へも行ききました。しかしみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはそうした手続の済むまで、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまったのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のような薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、

彼の頸筋くびすじから一度に迸ほとばしつたものと知れました。私は

日中の光で明らかにその迹あとを再び眺ながめました。そうし

て人間の血の勢いきおいというものの劇はげしいのに驚きました。

奥さんと私はできるだけの手際てぎわと工夫を用いて、K

の室へやを掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸い彼の

蒲団ふとんに吸収されてしまったので、畳はそれほど汚れな

いで済みましたから、後始末はまだ楽でした。二人は

彼の死骸しがいを私の室に入れて、不断の通り寝ていている体

横にしました。私はそれから彼の実家へ電報を打ちに

出たのです。

私が帰った時は、Kの枕元まくらもとにもう線香が立てられて
いました。室へはいるとすぐ仏臭い烟ほとけくさ けむりで鼻を撲うたれた
私は、その烟の中に坐すわっている女二人を認めました。
私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜来さくやらいこの時が始めて
でした。お嬢さんは泣いていました。奥さんも眼を赤
くしていました。事件が起つてからそれまで泣く事を
忘れていた私は、その時ようやく悲しい気分きぶんに誘われ
る事ができたのです。私の胸はその悲しさのために、
どのくらい寛くわろいくつだか知れませんが、苦痛と恐怖でぐい
と握り締められた私の心に、一滴いってきの潤うるおいを与えてくれた

ものは、その時の悲しさでした。

私は黙って二人の傍そばに坐っていました。奥さんは私にも線香を上げてやれといいます。私は線香を上げてまた黙って坐っていました。お嬢さんは私には何ともいいません。たまに奥さんと一口二口言葉を換かわす事がありました。それは当座の用事についてのみでした。お嬢さんにはKの生前について語るほどの余裕がまだ出て来なかつたのです。私はそれでも昨夜ゆうべの物凄ものすごい有様を見せずに済んでまだよかつたと心のうちで思いました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、

折角せつかくの美しさが、そのために破壊されてしまいそうで私は怖こわかったです。私の恐ろしさが私の髪の毛の末端まで来た時ですら、私はその考えを度外どがいに置いて行動する事はできませんでした。私には綺麗きれいな花を罪もないのに妄みだりに鞭むちうつと同じような不快がそのうちに籠こもっていたのです。

国元からKの父と兄が出て来た時、私はKの遺骨をどこへ埋うめるかについて自分の意見を述べました。私は彼の生前せいかんに雑司ぞうしヶ谷がや近辺をよくいっしょに散歩した事があります。Kにはそこが大変気に入っていたので

す。それで私は笑談じょうだんほんぶん半分に、そんなに好きなら死んだらここへ埋めてやろうと約束した覚えがあるのです。

私も今その約束通りKを雑司ヶ谷ほうむへ葬ったところで、どのくらいの功德くどくになるものかとは思いました。けれども私は私の生きている限り、Kの墓の前にひざまず跪いて月々私の懺悔ざんげを新たにしたかったです。今まで構い付けなかったKを、私が万事世話をして来たという義理もあつたのでしよう、Kの父も兄も私のいう事を聞いてくれました。

五十一

「Kの葬式の帰り路みちに、私はその友人の一人から、Kがどうして自殺したのだろうという質問を受けました。事件があつて以来私はもう何度となくこの質問で苦しめられていたのです。奥さんもお嬢さんも、国から出て来たKの父兄も、通知を出した知り合いも、彼とは何の縁故もない新聞記者までも、必ず同様の質問を私に掛けない事はなかつたのです。私の良心はそのたび

にちくちく刺されるように痛みました。そうして私はこの質問の裏に、早くお前が殺したと白状してしまえという声を聞いたのです。

私の答えは誰に対しても同じでした。私はただ彼の私宛あてで書き残した手紙を繰り返すだけで、外ほかに一口もひとくち附け加える事はしませんでした。葬式の帰りに同じ問いを掛けて、同じ答えを得たKの友人は、懐ふところから一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながらその友人によって指し示された箇所を読みました。それにはKが父兄から勘当された結果厭世えんせい的な考えを起して

自殺したと書いてあるのです。私は何にもいわずに、その新聞を^たたんで友人の手に帰しました。友人はこの外にも^{ほか}Kが気が狂って自殺したと書いた新聞があると、いつて教えてくれました。忙しいので、ほとんど新聞を読む暇がなかった私は、まるでそうした方面の知識を欠いていました。腹の中では始終気にかかっていたところでした。私は何よりも^{うち}宅のものの迷惑になるような記事の出るのを恐れたのです。ことに名前だけにせよお嬢さんが引合いに出たら^{たま}堪らないと思つていたので。私はその友人に外^{ほか}に何とか書いたのではない

かと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、ただその二種ぎりだと答えました。

私が今おる家へ引つ越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にいるのを厭がりますし、私もその夜の記憶を毎晩繰り返すのが苦痛だったので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二カ月ほどしてから私は無事に大学を卒業しました。卒業して半年も経たないうちに、私はとうとうお嬢さんと結婚しました。外側から見れば、万事が予期通りに運んだのですから、目出度といわなければ

なりません。奥さんもお嬢さんもいかにも幸福らしく見えました。私も幸福だったのです。けれども私の幸福には黒い影が随ついていました。私はこの幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思いました。

結婚した時お嬢さんが、——もうお嬢さんではありませんから、妻さいといっています。——妻が、何を思い出したのか、二人でKの墓はかまい参りをしようといいい出しました。私は意味もなくなただぎよつとしました。どうしてそんな事を急に思い立ったのかと聞きました。妻は二人

揃そろつて

お参りをしたら、Kがさぞ喜ぶだろうというのです。私は何事も知らない妻の顔をしげじげ眺ながめていました。妻からなぜそんな顔をするのかと問われて始めて気が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立って雑司ぞうしヶ谷がやへ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗ってやりました。妻はその前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私といつしよになつた顛末てんまつを述べてKに喜んでもらうつもりでしたろう。私は腹の中で、ただ自分が悪かったと繰り返すだ

けでした。

その時妻はKの墓を撫なでてみて立派だと評ひんしていません。その墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見立みたてたりした因縁いんねんがあるの
で、妻はとくにそういいたかつたのでしよう。私はその新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋うずめられたKの新しい白骨はくごつとを思い比べて、運命の冷罵れいばを感じずにはいられなかつたのです。私はそれ以後決して妻といつしよにKの墓参りをしない事にしました。

五十二

「私の亡友に対するこうした感じはいつまでも続きま
した。実は私も初めからそれを恐れていたのです。年
来の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を挙げた
といえばいえない事もないでしょう。しかし自分で自
分の先が見えない人間の事ですから、ことによるとあ
るいはこれが私の心持を一転して新しい生涯に入るはい
端緒いとくちになるかも知れないとも思つたのです。ところが

いよいよ夫として朝夕妻と顔を合せてみると、私の果敢ない希望は手厳しい現実のために脆くも破壊されてしまいました。私は妻と顔を合せているうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私をどこまでも結び付けて離さないようにするのです。妻のどこにも不足を感じない私は、ただこの一点において彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐそれが映ります。映るけれども、理由は解らないのです。私は時々妻からなぜそんなに考えているのだとか、何か気に入らない事があるのだらうとかい

う詰問きつもんを受けました。笑つて済ませる時はそれで差支さしつかえないのですが、時によると、妻の癩かんも高こうじて来ます。しまいには「あなたは私を嫌つていらつしやるんでしよう」とか、「何でも私に隠していらつしやる事があるに違ちがいない」とかいう怨言えんげんも聞かなくてはなりません。私はそのたびに苦しみました。

私は一層いっそう思い切つて、ありのままを妻に打ち明けようとした事が何度もあります。しかしいざという間際になると自分以外のある力が不意に来て私を抑おさえ付けるのです。私を理解してくれるあなたの事だから、説

明する必要もあるまいと思いますが、話すべき筋だから話しておきます。その時分の私は妻に対して己れおのを飾る気はまるでなかつたのです。もし私が亡友に対すると同じような善良な心で、妻の前に懺悔ざんげの言葉を並べたなら、妻は嬉うれし涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違いないのです。それをあえてしない私に利害の打算があるはずはありません。私はただ妻の記憶に暗黒な一点を印いんするに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫ひとしずくの印気インキでも容赦ようしやなく振り掛けるのは、私にとって大変な苦痛だつたのだと

解釈して下さい。

一年経つてもKを忘れる事のできなかつた私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐くちくするため書物に溺おぼれようと力つとめました。私は猛烈いきおいな勢をもつて勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公おおやけにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵こしらえて、無理にその目的の達せられる日を待つのは嘘うそです。すから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋うずめていられなくなりました。私はまた腕組みをして世の中を眺ながめだしたのです。

妻はそれを今日こんにちに困らないから心に弛たるみが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人ぐらいは坐すわつていてどうかこうか暮きして行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支さしつかえのない境遇にいたのですから、そう思われるのももつともです。私も幾分かスポイルされた気味がありました。しかし私の動かなくなつた原因の主なもの、全くそこにはなかつたのです。叔父おじに欺あざむかれた当時の私は、他ひとの頼たのみにならない事をつくづくと感じたには相違ありませんが、他ひとを悪く取るだけあつて、自分はまだ確かな気が

していました。世間はどうかであろうともこの己おれは立派な人間だという信念がどこかにあつたのです。それがKのために美事みごとに破壊されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想あいそを尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなつたのです。

五十三

「書物の中に自分を生埋めにする事のできなかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとはいいません。けれども飲めば飲める質でしたから、ただ量を頼みに心を盛り潰そうと力めたのです。この浅薄な方便はしばらくするうちに私をなお厭世的にしました。私は爛酔の真最中にふと自分の位置に気が付くのです。自分はお

ざとこんな真似まねをして己れを偽いつわっている愚物ぐぶつだという事に気が付くのです。すると身振みぶるいと共に眼も心も醒さめてしまいます。時にはいくら飲んでもこうした仮装状態にさえ入はいり込めないでむやみに沈んで行く場合も出て来ます。その上技巧で愉快を買あつた後あとには、きつと沈鬱ちんうつな反動があるのです。私は自分の最も愛している妻さいとその母親に、いつでもそこを見せなければならなかつたのです。しかも彼らは彼らに自然な立場から私を解釈して掛かります。

妻の母は時々気拙きまづい事を妻にいうようでした。それ

を妻は私に隠していました。しかし自分は自分で、単独に私を責めなければ気が済まなかつたらしいのです。責めるといつても、決して強い言葉ではありません。妻から何かいわれたために、私が激した例はほとんどもなかつたくらいですから。妻はたびたびどこが気に入らないのか遠慮なくいつてくれと頼みました。それから私の未来のために酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて「あなたはこの頃人間が違った」といいました。それだけならまだいいのですけれども、「Kさんが生きていたら、あなたもそんなにはならなかつたで

しよう」というのです。私はそうかも知れないと答えた事がありました。私の答えた意味と、妻の了解した意味とは全く違っていたのですから、私は心のうちで悲しかったのです。それでも私は妻に何事も説明する気にはなれませんでした。

私は時々妻に詫あやまりました。それは多く酒に酔って遅く帰った翌日あくるひの朝でした。妻は笑いました。あるいは黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。私はどつちにしても自分が不愉快で堪たまらなかったのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫

まるのつまり同じ事になるのです。私はしまいに酒を止めました。妻の忠告で止めたというより、自分で厭いやになつたから止めたといつた方が適當でしょう。

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。しかし読めば読んだなりで、打ち遣うやつて置きます。私は妻から何のために勉強するのかという質問をたびたび受けました。私はただ苦笑していました。しかし腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。

理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せないのだと思うとますます悲しかったのです。私は寂寥せきぼくでした。どこからも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事もよくありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていたせいでもありません。私が、私の観察はむしろ簡単でしかも直線的でした。Kは正まさしく失恋のために死んだものとすぐ極きめてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分たやすで、同じ現象に向つてみると、そう容易たやすくは解決

が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不充分でした。私はしまいにKが私のようにたつた一人で淋さむしくつて仕方がなくなつた結果、急に所決しよけつしたのではなからうかと疑い出しました。そうしてまた慄ぞつとしたのです。私もKの歩いた路みちを、Kと同じように辿たどっているのだという予覚よかくが、折々風のように私の胸を横過よこぎり始めたからです。

五十四

「その内妻さいの母が病気になりました。医者に見せると
到底癒とうていなおらないという診断でした。私は力の及ぶかぎり
懇切に看護をしてやりました。これは病人自身のため
でもありますし、また愛する妻のためでもありました
が、もつと大きな意味からいうと、ついに人間のため
でした。私はそれまでにも何かしたくつて堪たまらなかつ
ただけけれども、何もする事ができないのでやむをえ

ず懐手ふところをしていただけに違いありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善いい事をしたという自覚を得たのはこの時でした。私は罪滅つみほろぼしとでも名づけなければならぬ、一種の気分支配しはいされていたのです。

母は死にました。私と妻さいはたった二人ぎりになりました。妻は私に向って、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたといいました。自分自身さえ頼りにする事のできない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思いました。

また不幸な女だと口へ出してもいいました。妻はなぜだと聞きます。妻には私の意味が解わからないのです。私もそれを説明してやる事ができないのです。妻は泣きました。私が不断ふだんからひねくれた考えで彼女を観察しているために、そんな事もいうようになるのだと恨うらみました。

母の亡くなつた後あと、私はできるだけ妻を親切に取り扱つてやりました。ただ、当人を愛していたからばかりではありません。私の親切には箇人こじんを離れてもつと広い背景があつたようです。ちようど妻の母の看護を

したと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は満足らしく見えました。けれどもその満足のうちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄きはくな点がどこかに含まれているようでした。しかし妻が私を理解し得たにしたところで、この物足りなさは増すとも減る気遣きづかいはなかつたのです。女には大きな人道の立場から来る愛情よりも、多少義理をはずれても自分だけに集注される親切を嬉うれしがる性質が、男よりも強いように思われますから。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもびたり

と一つになれないものだろうかといいました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事をしておきました。妻は自分の過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。私は驚きました。私はぞつとしました。しかししばらくしているうちに、私の心はその物凄い閃きに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるもののごとくに思われ

出して来たのです。私はそうした心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑うたぐつてみました。けれども私は医者にも誰にも診みてもらおう気にはなりませんでした。

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓まいげつへ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくしてやれと私に命じます。私はその感じのため、知らない路傍ろぼうの人から鞭むちうたれたいとまで思つた事もあります、こうした階段を段々経過して行くう

ちに、人に鞭うたれるよりも、自分で自分を鞭うつべきだという気になります。自分で自分を鞭うつよりも、自分で自分を殺すべきだという考えが起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日までこんにち何年になるでしょう。

私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。しかし私のもっている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思

うと、私は妻さいに対して非常に気の毒な気がします。

五十五

「死んだつもりで生きて行こうと決心した私の心は、時々外界の刺戟しげきで躍り上がりました。しかし私がどの方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否いなや、恐ろしい力がどこからか出て来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。そうしてその力が私にお前は何をする資格もない男だと抑おさえ付けようといつて聞かせます。すると私はその一言いちげんで直すぐぐたりと

萎しおれてしまいます。しばらくしてまた立ち上がろうとすると、また締め付けられます。私は歯を食いしばつて、何で他の邪魔ひとをするのかと怒鳴り付けます。不思議な力は冷やかな声ひやで笑います。自分でよく知つてゐるくせにといいます。私はまたぐたりとなります。

波瀾ほらんも曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があつたものと思つて下さい。妻さいが見て齒痒はがゆがる前に、私自身が何層倍齒痒なんぞうばいい思しいを重ねて来たか知れないくらいです。私がこの牢屋ろうやの中に凝じつとしてゐる事がどうしてもできなくなつ

た時、またその牢屋をどうしても突き破る事ができなくなつた時、ひつきよう必竟私にとつて一番楽な努力で遂行すいこうできるものは自殺より外ほかにないと私は感ずるようになったのです。あなたはなぜといつて眼を睜みはるかも知れませんが、いつも私の心を握り締めに来るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食い留めながら、死の道だけを自由に私のために開けておくのです。動かずにいればともかくも、少しでも動く以上は、その道を歩いて進まなければ私には進みようがなくなつたのです。

私は今日こんにちに至るまですでに二、三度運命の導いて行

く最も楽な方向へ進もうとした事があります。しかし

私はいつでも妻に心を惹ひかされました。そうしてその

妻をいつしよに連れて行く勇氣は無論ないので。妻

にすべてを打ち明ける事のできないくらいな私ですか

ら、自分の運命の犠牲ぎせいとして、妻の天寿てんじゆを奪うなどと

いう手荒てあらな所作しよさは、考えてさえ恐ろしかったのです。

私に私の宿命しよめいがある通り、妻には妻の廻まわり合せがあり

ます、二人を一束ひとたばにして火に燻くべるのは、無理という

点から見ても、痛ましい極端としか私には思えませ

でした。

同時に私だけがなくなつた後の妻を想像してみる
といかにも不憫ふびんでした。母の死んだ時、これから世の
中で頼りにするものは私より外になくなつたといつた
彼女の述懐じゆつかいを、私は腸はらわたに沁しみ込むように記憶させられ
ていたのです。私はいつも躊躇ちゆうちゆうしました。妻の顔を見
て、止よしてよかつたと思う事もありました。そうして
また凝じつと竦すくんでしまいます。そうして妻から時々物足
りなような眼で眺ながめられるのです。

記憶して下さい。私はこんな風ふうにして生きて来たの

です。始めてあなたに鎌倉かまくらで会った時も、あなたと
いつしよに郊外を散歩した時も、私の気分が大した変
りはなかつたのです。私の後ろにはいつでも黒い影が
括くッ付っいていました。私は妻さいのために、命を引きずつ
て世の中を歩いていたようなものです。あなたが卒業
して国へ帰る時も同じ事でした。九月になつたらまた
あなたに会おうと約束した私は、嘘うそを吐ついたのではあ
りません。全く会う気でいたのです。秋が去つて、冬
が来て、その冬が尽きても、きつと会うつもりでいた
のです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御めいじてんのう ほうぎよになりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後あとに生き残っているのは必竟ひつきよう時勢遅れだという感じが烈はげしく私の胸を打ちました。私は明白あからさまに妻にそういいました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死じゆんしでもしたらよかろうと調戯からかいました。

五十六

「私は殉死という言葉をはほとんど忘れていました。
平生へいぜい使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、
腐れかけていたものと見えます。妻の笑談じょうだんを聞いて始
めてそれを思い出した時、私は妻に向つてもし自分が
殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答
えました。私の答えも無論笑談に過ぎなかつたのです
が、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を

盛り得たような心持がしたのです。

それから約一カ月ほど経たちました。御大葬ごたいそうの夜私はいつもの通り書斎すわに坐すわつて、相図あいずの号砲ごうほうを聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知のごとく聞こえました。後で考えると、それが乃木大将のぎたいしょうの永久に去つた報知にもなつていたのです。私は号外を手にして、思わず妻に殉死だ殉死だといいました。

私は新聞で乃木大将の死ぬ前に書き残して行つたものを読みました。西南戦争せいなんせんそうの時敵に旗を奪とられて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日こんにちまで

生きていたという意味の句を見た時、私は思わず指を折って、乃木さんが死ぬ覚悟をしながら生きながらえて来た年月としつきを勘定して見ました。西南戦争は明治十年ですから、明治四十五年までには三十五年の距離があります。乃木さんはこの三十五年の間あいだ死のう死のうと思つて、死ぬ機会を待つていたらしいのです。私はそういう人にとつて、生きていた三十五年が苦しいか、また刀を腹へ突き立てた一刹那いっせつなが苦しいか、どつちが苦しいだろうと考えました。

それから二、三日して、私はとうとう自殺する決心

をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由がよく解わからないように、あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑のみ込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは箇人こじんのもって生れた性格の相違とといった方が確たしかかも知れません。私は私のできる限りこの不可思議な私というものを、あなたに解らせるように、今までの叙述で己おのれを尽つくしたつもりです。

私は妻さいを残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは仕合しあわせです。私は妻に残酷な

驚怖きょうふを与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない間まに、こつそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から頓死とんししたと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になりませんが、その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然はつきりえが描き出す事がで

きたような心持がして嬉しいのです。私は酔興すいきように書く
のではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経
験の一部分として、私より外ほかに誰も語り得るものはな
いのですから、それを偽いつわりなく書き残して置く私の努
力は、人間を知る上において、あなたにとつても、外
の人にとつても、徒勞ではなかろうと思えます。
渡辺華山わたなべかざんは邯鄲かんたんという画えを描かくために、死期を一週間
繰り延べたという話をつい先達せんだつて聞きました。他ひとから
見たら余計な事のようにも解釈できましようが、当人
にはまた当人相応の要求が心の中うちにあるのだからやむ

をえないともいわれるでしょう。私の努力も単にあな
たに対する約束を果たすためばかりではありません。
半ばなか以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。
しかし私は今その要求を果たしました。もう何にも
する事はありません。この手紙があなたの手に落ちる
頃ころには、私はもうこの世にはいないでしょう。とくに
死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷いちがやの
叔母おばの所へ行きました。叔母が病気で手が足りないとい
うから私が勧めてやったのです。私は妻の留守の間あいだ
に、この長いものの大部分を書きました。時々妻が

帰つて来ると、私はすぐそれを隠しました。

私は私の過去を善悪ともに他の参考ひとに供するつもりです。しかし妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私には妻には何にも知らせたくないので。妻が己おのれの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存しておいてやりたいのが私の唯一ゆいいつの希望なのです。それから、私が死んだ後あとでも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい。」



こころ下 -先生と遺書-
夏目漱石 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「こころ」集英社文庫、集英社

1991（平成3）年2月25日第1刷

1995（平成7）年6月14日第10刷

初出：「朝日新聞」

1914（大正3）年4月20日～8月11日

※ 誤植の修正は「漱石全集」岩波書店を参照しました。

※ 底本は、物を書える際や地名などに用いる「マ」（区点番号586）を、大振りにつけています。

入力：j.utiyama

校正：伊藤時也

1999年7月31日公開

2004年2月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ